

Title	御伽草子本の本文について：小敦盛と横笛草紙
Sub Title	Textual criticism of Koatsumori (小敦盛) and Yokobue-soshi (横笛草紙) (Otogi soshi of Shibukawa edition) compared with their old manuscripts
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1963
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.2 (1963. 3) ,p.171- 242
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000002-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

御伽草子本の本文について

——小敦盛と横笛草紙——

松 本 隆 信

序

江戸時代の中頃までの間に、御伽文庫、あるいは御伽草子の名で呼ばれる、「文正さうし」以下二十三篇の作品を揃えた叢書が板行されている。美濃紙刷、絵入横本仕立の同じ体裁で、はじめは三十九冊であったが、後に一篇一冊の二十三冊に合綴された。出板元は大坂の書肆、渋川清右衛門である。この板本を仮に「御伽草子本」の名称で呼ぶこととする。標題に掲げたのもその意味である。

御伽草子本の板行年代は、古く藤井紫影博士が享保の頃と推定されて以来、それが通説となって踏襲されてきた。前記の渋川板の揃い本に関する限り、この説はほぼ当たっていると考えられるが、その後笹野堅氏、横山重氏によって、この御伽草子本には、その前に基づく所の板本があったことが明らかにされた。笹野氏は「室町時代短篇集」所載の「御伽草子攷」において、二十三篇中の「文正さうし」と「和泉式部」の二篇に、御伽草子本と全く同じ装幀、

板式で、料紙に間似合紙を使い、挿絵に丹緑等の彩色を施した本が存在することを報告され、御伽草子本はこれの再印であろうと想像された。更に横山氏は、「室町時代物語集」の解題の中で、右二篇の外、「七草草紙」「さざれいし」「酒吞童子」の三篇にも、同じ丹緑横本のあることを記され、御伽草子本はこれの覆刻であるとされた。私もこれと同種の丹緑横本として、早大図書館で「小町草紙」を、京大図書館で「物くさ太郎」（下巻のみの零本）を見ることを得た。まだ外にも伝存するかも知れないが、私の知り得たのは以上七篇である。横山氏は、御伽草子本が二十三篇を通じて、書風や画風が全く統一されている点から、二十三篇全部に亘って、そのもととなった丹緑横本が、かつては存在したものと想像されたが、これは恐らく正しいであろう。御伽草子本は、装幀、本文の字体や書き方、挿絵の構図等から見て、奈良絵本の形態を模したことが明らかであるので、その原態が上記の七篇の丹緑本の如く、間似合紙を用い、挿絵に彩色を施したものであったことは当然考えられる所である。ただ、御伽草子本が、笹野氏の言われるように、丹緑本の後刷であるのか、あるいは横山氏の言われるように覆刻であるのかは、まだ実物を突合せてくわしく調査していないので、私自身の判断を述べるに至っていない。

次に、この丹緑横本の板行を、笹野氏は寛文頃とされ、横山氏は明暦以前寛永頃にまで遡り得るかと考えられた。この本の板式は、普通の板本と異なった特殊なものであるので、その面から年代を決定することは難しいようである。最も推定の拠り所となり得るのは、挿絵に施された丹緑等の彩色の味であろうが、この方面についても、私は知識が乏しいので、少くとも万治寛文までは降るまいとの感じを受ける程度で、はっきりした推定は言い得ない。

ところで、御伽草子本に収められた二十三篇は、大部分が室町時代の成立にかかる物語である所から、この御伽草子という名称が、室町時代物語の汎称にまで範囲が拡げられ、ひいては、仮名草子・浮世草子に対して、それに先行

する小説形態をあらわす文学史上の術語として採用され、一般に用いられるようになった。その結果、今度は逆に、この御伽草子本二十三篇の叢書が、室町時代物語の代表的作品集であるかの如き扱いを受ける傾向を生じ、またそれから二十三篇の作品のテキストとしても、この叢書が最も多く利用され、これによって室町物語の文学的価値が云々される場合が多かった。御伽草子本が、江戸中期以後室町時代物語の中で最も流布していた本であることは事実であるが、しかし、果してこれによって、多種多様な室町物語全体を代表せしめ得るかどうかは、甚だ疑問である。二十三篇の中に、室町物語の中で最も時代的特徴を示している所謂本地物の、正統的作品が入っていないという一事を見ても、それは明らかであろう。（「梵天国」「物くさ太郎」「浦島太郎」は本地物的形式をとっているが、本地物としては末流の擬似作品と言うことが出来よう。）また、本文のテキストとしての価値についても、室町物語は、一つの作品に、本文の著しく異なった伝本が幾つも伝存する場合が多く、そういう諸本の中において、御伽草子本の本文を見ても、それが室町期の原態からは相当に離れてしまったのではないかとの疑問を起させる例がある。室町物語研究のためのテキストとして、御伽草子本のもつ価値には、検討し直さなければならぬ多くの点があると思うのである。

本稿は、そのような御伽草子本の本文のテキストとしての価値を考える前提として、それが室町期の原態の本文と、どのような関係にあるかを、事実によって示そうとするものである。それには、同一の作品について、確実に室町期の本文を有すると認められる伝本との比較によらなければならない。二十三篇の中で、私がそのような古本を見ることが得たのは、「文正さうし」「蛤の草紙」「小敦盛」「横笛草紙」の四篇である。

「鉢かづき」「一寸法師」の二篇には、題材はほぼ同類といえるが、筋に相当の違いのある古写本が存在する。それらは題名も異なっているので、むしろ改作といった方が適當である。「酒吞童子」には、有名な南北朝頃の絵巻「大江山絵詞」があ

るが、これと御伽草子本とは、本文の調子が離れ過ぎている。御伽草子風の本文をもつ「大江山」あるいは「伊吹山」と題する絵巻の類は多数伝存するが、室町期にまで上る古本には、未だ接していない。「浜出草紙」には、幸若舞としての古写本は存在する。

他の作品にも、書写の年代は江戸期にまで降っても、本文は古い姿をとどめていると想像出来る伝本は見られるが、ここでは一応、本そのものから言って、確実性の高いものにしぼることにしたい。今回は紙面の都合で、右四篇の中「小敦盛」と「横笛草紙」の二篇を取り上げる。

なお、御伽草子本の本文というのは、とりもおおさず、それが基づいた丹緑横本の本文になる訳であるが、その丹緑本の本文は、その前にあった奈良絵本・写本の類の本文を忠実に鰯刻したものであるかも知れない。また、書写あるいは板行の時代は新しくとも、本文そのものは、古い本より古態を存するという場合もあり得るので、古写本と御伽草子本との本文の比較は、本の新古にとらわれずに、出来るだけ白紙の状態で行なってみたいと思う。

本稿に多く引用した御伽草子本の本文は、慶応義塾図書館所蔵の揃い本に拠った。この本は第二十三の「酒吞童子」の奥にある刊記を削った後印本で、保存の良い美本であるが、板面の磨滅から、濁点や句点が消えてしまったのではないかと思われる個所が存する。今は、濁点はそのまま掲出し、句点は原本のそれにとらわれずに私に施した。また、原本に附してある振仮名は、特に必要と思われるものの外は省略した。

御伽草子本以外の諸本の本文引用に当たっても、出来るだけ原本に忠実であることに努めたが、漢字は現行の字体に統一し、改行、句点は私に施した。

諸本の本文を、長文に亘って、二段あるいは三段に並べて掲出した個所においては、上下の対照の便を計ったために、空行を生じた部分があるが、本文はすべて続いているのである。

小 敦 盛

本作品の古鈔本としては、左の三本が伝存する。

横山重氏赤木文庫蔵絵巻 一軸（外題「敦盛絵」）

本書は、近く横山重氏編「源平物語集」に翻刻される予定である。

慶応義塾図書館蔵絵巻 一軸

牡丹唐草文様の金襴表紙。料紙楮紙。題簽は半ば剥落し、「敦盛」と「詞」の三字の外読み得ない。内題なし。紙幅二十三糎。字面高さ約二十一糎。横山重氏旧蔵本。

天理図書館蔵絵巻 一軸

菱目卷龍織文緑色表紙。見返し金泥秋草絵。料紙金泥下絵の鳥の子、裏打。紙幅二八・四糎。字面高さ約二十三糎。外題、内題なし。奥書「依良春所望染陋筆／者也（花押）親王」。識語（別紙継）「右一巻絵草子言葉書者／青蓮院宮尊朝親王前廉之御真跡也／殊御奥書御判形右在之最分明也／正保元年／極月下旬 古筆了 佐（花押）（印）」。横山重氏旧蔵本。

右三本はいずれも、詞書十六段、絵十五面より成る室町末期の古絵巻で、（天理本の筆者青蓮院尊朝親王は慶長二

年、六十六才で薨）詞書の文章、絵の構図共に全く同系である。ただ天理本の本文のみは、他の二本よりも漢字をやや多く使用し、語句の末に小異のある個所が存する。本稿における、絵巻の本文の引用に当っては、私が直接原本につくことを得た、慶応義塾図書館蔵本に拠った。

次に、江戸期の伝本には、御伽草子本と全く同系統の本文をもつものの外、管見に入ったものが無い。国会図書館に奈良絵本（下巻のみの零本）があり、また古書市等で時折奈良絵本を見かけるが、皆御伽草子本と本文は変わらないようである。板本も、御伽草子本以外は見ることを得なかった。（但し、寛文五・六年頃の刊行と推定される無刊記の「書籍目録」に「子あつもり一冊」が著録されている。御伽草子本は、はじめ二冊であったので、これが前述の丹緑横本を指すのではなさそうである。すると、外に別板の本が存在したことが想像される。）従って、御伽草子本「小敦盛」の本文研究に当って、資料となし得るのは、前掲の三種の絵巻のみである。以下、絵巻と御伽草子本との、二系統の伝本を比較してみる。

二

御伽草子本と古絵巻との、新旧二種の伝本は、詞章は勿論のこと、内容、筋の運びの上にも相違する所が多い。まず敘述内容の上に見られる相違点を、順序を追って摘出すると次の如くである。

(1) 絵巻の巻頭は、『さるほとに、一のたにのかつせむやふれしかは、しゆしやう、二位殿をはしめたてまつり、みなく舟にとりのり、おちさせ給ひける』の書き出しに始まり、落ちて行く敦盛が熊谷直実に呼び戻され、一騎打の末に討たれる場面が描かれている。御伽草子本にはこの場面は無く、これに続く、都西山の傍に忍んでいた

敦盛の北の方が、夫の討死を聞いて悲歎に沈む所から書き起されている。

(2) 敦盛の北の方について、絵巻は、少納言入道信西の孫、洞院の娘、弁宰相と記しているが、御伽草子本は、巻頭の所では北の方の素姓のことに何も触れていない。

(3) 下り松の辺に捨てられた敦盛の若君が、法然上人に拾われて成長した後、絵巻では、若君が同じ年頃の稚児達と弓遊びをしている時に、勝負の争いから或る稚児に、『ちゝはゝもなきみなしこか、われくゝにむかひて、くちをきく事よ、上人とりあけさせ給ひてこそ、かくはあれ』と罵られ、父母の無い悲しさを上人に訴えるという挿話がある。御伽草子本にはこの弓遊びの記事が無い。

(4) 法然上人の計らいで、北の方が若君と対面をすることが出来た際に、絵巻には、熊谷入道が敦盛から託された形見の直垂と笛とを、北の方に手渡す場面がある。その直垂には、『なからへて契らさりける物ゆへに、あはすはかくはおもはさらまし』という敦盛の歌が書き留めてあった。これを見て、北の方は悲しみの思いを新たにす。御伽草子本にはこの条もまた無く、従つて右の歌も無い。

(5) 巻末に、絵巻では生田から父敦盛の骨を持ち帰った若君が、母共々に出家を遂げ、若君はその後修行を積んで、西山のせんゑ上人と呼ばれ仰がれたとある。御伽草子本は、北の方は出家するが、若君はただ法然上人の許へ返したとあるのみで、出家のことを記さず、従つてせんゑ上人云々の記事も無い。なお、北の方が髪を下して柴の庵を結び、敦盛の菩提を弔う条に、絵巻には北の方の歌二首が記されているが、御伽草子本はこの歌も欠いている。

右の(1)から(5)までを見ると、すべて、絵巻に較べて御伽草子本は、筋の運びが簡略になっていることが示されている。

る。現在の所、この両者の間隙を埋め得る性質をもった伝本を見ることが出来ないで、この二種の伝本を突き合わせて考える外ないが、その場合、両者は全く無関係であるのか、あるいは絵巻を省略した形が御伽草子本であるのか、逆にまた、御伽草子本の基いた祖本が素朴な形態のものであって、絵巻はそれを増補したものであるのかといった、三つの見方が出来よう。そこで右の五個所の各々について、両者がどういう関係に立つかを検討してみよう。

(1) この物語は、平家物語に見える「六代」や「小宰相」などと同じく、平家一門の滅亡にまつわる哀話の一つである。但し平家物語には、敦盛の妻子についての記述はなく、後世成長した後日談の一つであろう。本作と同じ題材を扱ったものに謡曲の「生田敦盛」がある。謡曲と本作との成立の先後関係は明らかにし得ないが、謡曲に語られているのは、敦盛の遺児が賀茂の明神の利生を蒙って、生田で父の亡霊に逢う部分のみである。物語としての本作から言っても、北の方と若君との二人を主人公とした、敦盛死後の事件を語る所に主題があるのであるから、一の谷の敦盛、直実組打の場面は、特に必要があるとは思われない。一篇の結構からすれば、御伽草子本の如き形の方がすっきりしていると言ふことが出来よう。その意味では、絵巻のこの部分は増補として考えることも可能である。

ただ、御伽草子本の冒頭を見ると、

扱もあつもりのきたの御かたは、みやこにし山のかたはらに、ふかくしのひ給ひけるが、あつもりのうたれさせ給ひぬるとき
こしめし、夢かうつゝか、こはいか成ことぞと、ふししづみなき給ふ

という文章で始まるが、この類の物語としては、このような書き出しの仕方は、やや特異な感じを与える。御伽草子本二十三種を見ても、冒頭の文章は、

それむかしがいまにいたるまで、めでたきことをきゝつたふるに、いやしきものゝ、ことのほかになりいでゝ、はじめよりの

ちまでも、ものうきことなくめでたきは、ひたちのくにに、しほやきのぶんしやうと、申ものにてぞはんべりける（文正さうし）
中むかしのことにや有けん、かはちのくに、かたのゝへんに、びつちうのかみさねたかといふ人ましくける（はちかつき）
そもくせいわのころ、だいに、こまちといふ、いろこのみのゆふぢよあり（小町草紙）

中ごろのことにや、けんれいもんるんの御とき、かるも、よこぶえとて、二人の女はう侍りけり（よこ笛草紙）

といった風に、何時何処に誰々がいたと、主人公の紹介で始まるものが多い。そういう類型の中において見ると、「小敦盛」の冒頭の文は破格を感じさせる。それはむしろ幸若舞曲の書き出しに近いものがある。

そこで、これは(2)の点に関係してくるのであるが、絵巻は、一の谷での敦盛討死の段が終った後に、『さても、せうなこん入道しんせいの御まこ、とうるんの御むすめ、へんのさいしやうと申けるは、みやこのうちのひしんとそ、きこえたまひける』という文があつて、ここから御伽草子本の巻頭と同じ場面の敘述に入ってくる。絵巻の巻頭もまた、前掲の如く（一七六頁参照）、幸若風であつて、物語の書き出しとしては、右の文の方がふさわしい。（絵巻の第一段は、幸若の「敦盛」と関係があるのかもしれない。）従つて、絵巻の方だけについて言えば、この第一段はますます附加的な性質を強めてくる。しかし、御伽草子本の方に即してみると、逆に、同本がその本文を作製するに當つて扱つた祖本には、絵巻のような敦盛討死の場面があつたのを、それを省略したのではないか。その際に絵巻にあるような北の方の素姓を記した文をも書き洩したために、破格を感じさせる書き出しになつたのではないかという疑問が起きてくる。つまり(1)の部分については、両者の関係を決定的には断定出来ないのである。

(3) 絵巻にある弓遊びの記事は、話そのものは挿話的性質をもつもので、筋の運びの上で無くてならないものではないが、法然上人の許で成長した若君が、父母のない孤独を身に泌みて感じさせられる契機として、次の場面への推移をなめらかにする役割をなしている。その意味で、この記事の存在意義が認められ、絵巻の増補と見るより、御伽

草子本の省略とした方が適切であると言いたいのであるが、なお、御伽草子本には、丁度絵巻のこの記事に当る部分に、意味のはっきりしない短い敘述があることも、右の想像を助けている。そのことについては、後で再び問題にすることとする。

(4) 絵巻のこの場面での立役者は熊谷入道である。日頃法然上人の許で若君と共に生活し、若君が敦盛の俤に少しも違わぬのを見て、不審に思いながら涙を流していた熊谷として、若君が敦盛の遺児と判明した際の感動は一しおであった筈であり、この母子再会の場面に彼が登場してきて、敦盛の形見の品を北の方に手渡すという筋書は極めて効果的である。そして、その形見の品を見て、若君の亡き父を慕う気持がいよ／＼募り、次の賀茂の明神に祈請をかける段へ移ってゆくという過程も、絵巻の方が自然でよどみが無い。御伽草子本はこの記事を欠くために、脇役として重要な人物であるべき熊谷の働く場面が全く無く、わずかに附随的に名を出してくるに過ぎなくなっているし、この物語の前半のクライマックスである母子対面の場面の哀れさを減殺する結果になっている。つまり文学的な効果という面からみて、この場面は相当に重要性をもっているわけで、その点からして、これが後からの増補とは考えにくいのである。もしそうであるとすれば、何故御伽草子本は、こういう良い場面を省略したのであるか。それは、(1)の点との関連において考えることが出来そうである。絵巻において熊谷が活躍しているのは、(1)の組打の段と、この(4)の段とである。御伽草子本がこの両方とも欠くのは、熊谷に関する記事を殊更省略しようとする意図があったからではないか。(1)のみでは、絵巻の増補か、御伽草子本の省略か断じがたいが、(1)と(4)とが対応した場面であり、しかも(4)が前述のような性質をもつ段であることを考えると、後者とする方が妥当性がありそうに思えるのである。

(5) 物語の結びをなすこの部分の両者の敘述の仕方を対照すると、絵巻は『さるほとに、とし月もかさなりけれ

は、御しゆつけあるこそあわれなれ、そのおりふし、きたの御かたも、御くしおろさせ給ひ云々』という風に、若君を主とし、母北の方を従として記述している趣が見えるのに対して、御伽草子本は、北の方のこのみを記し、若君のことは附随的に触れているに過ぎない。この作品の「小敦盛」という題名からしても、また内容において、若君が北の方にまさるとも劣らない重要な役割を演じている点から見ても、御伽草子本の書き方は、この物語の結びとして、今一つ筋が通っていない感を与える。それに対して、亡父に一目逢いたいとの宿願を果した若君が、出家して後に高僧となったとする絵巻の敘述は、この種の物語の常套形式に叶っていると見えよう。御伽草子本が、何故ここで北の方に焦点を合せて、若君のことを記さなかったのかは、充分には説明出来ない。ただ一つ注意されるのは、絵巻に、若君が後に『にし山のせんゑ上人』と呼ばれたとある点である。これは恐らく、法然門の高弟で浄土宗西山派の祖とされている、善慧房証空のことであろう。これは、若君が法然上人の許で育てられたということから思いついた、こじつけかもしれないが、更に言えば、この物語が浄土宗関係者の唱導の材料として利用されていたためではなからうか。若君の養育者として法然上人を殊更活躍せしめているのは、そこに理由を求めることが出来そうであるし、また、絵巻の巻末に『まことに、ありがたかりける事ともなり、御念仏を御ゑかうあるへく候』とある文には、そうした浄土教的唱導の口ぶりが聴きとられる。善慧上人の名を出してきたのも、その唱導意識の現れではないかと思うのである。既にそういう唱導的目的を失っていた御伽草子本は、敦盛の遺児を善慧上人と関係づけることの無稽さを知って、それを省いてしまったために、右のようにやゝ不備を感じさせる結びとなったのではないだろうか。

以上、絵巻の側にのみあって、御伽草子本には欠けている五つの個所を検討してきた所を総合すると、主観的な判断に依らざるを得ないけれども、御伽草子本は、絵巻の如き内容をもった本に抛りながら、それを種々の理由によつ

て省筆したものと考える方が、自然に解釈出来そうな結果が出てきた。

次に、御伽草子本には、筋の運びの上の相違ではないが、同一場面において、敘述の仕方が絵巻よりもかえって複雑になつてゐる個所が一つある。それは、賀茂の明神の夢想を蒙つて、若君が遙々と生田に赴き、父敦盛の亡霊に對面する場面である。少し長くなるが、両者の原文を對照して掲げてみる。左の文は、若君が一の谷のとある小さな御堂で縁行道をしてゐる人に逢う所からである。

絵 卷

御伽草子本

わかきみ物申さんと、の給ひければ、この人、たそとこたへ給ひ、このあたりは、人もとひこぬところに、いかなる物にあるそと、のたまへは、わかきみ、なくくおほせけるはみやこかたのものにて候か、ちこの御ゆくゑをたつね、此十日はかりもあゆみて候か、あまりに雨つよくふり候て、くらさはくらし、とはうもなく候、一夜のやとを御かし候へと申されければ、さてちはいかなる人にてわたり候そと、の給ふ

わかきみ、おもひ給ふやう、いまはいつくもけんしの世なりなのりてはいかと、おもひ給ひしかとも、よしやなのりてそれゆへに、わか身はいのちをうしなふとも、ちこのゆへとおもは、つらからしとて、おもひかへしわかちへは、へいけの一もん、しゆりの大夫の三なん、あつもりと申候なり、一のたにのかつせんに、うたれさせ給ひて候、その御ゆいこつも、御なつかしく候て、かもの明神にき

わかきみ、ほとくとたき、物申さんとありければ、たそや、この人もすまぬところに、物申さんといふは、いかなるものぞと有ければ、小人なくくのたまふやう、これは、みやこのものにて候が、ちのゆくゑをたづねて、此十余日と申に、あしにまかせてきたり候が、あめはふる、くらさはくらし、ゆくべきかたもなし、今宵一夜の御やどを御かし候へとこのたまふ、さてちはいかなるものぞと、のたまふとき

小人おほせけるは、父にて候人は、へいけの一もん、しゆりの大夫つねもりの御子、むくはんのたゆふあつもりと申人なり、一のたにのかせんに、うたれさせ給ひ候を、みづからこ

せい申て候へは、あらたに御むさうをかうふり、此すまのう
らまで、たつねまいり候と、のたまへは、この人この事をき
ゝて、とかくのことにはなくして、たゞさめくゝとぞ、なか
れける

やゝありて、わかきみの御てをとり、ゑんのうへに、ひきあ
けさせ給ひ、めしたる物の雨にぬれたる、つゆうちはらひ、
こなたへとて、うちによひ入申て、さこそはいときなき身の
道にもくたひれ給ふらん、やすみ給へとて、ひさをまくらに
せさせ申されければ、かなしきとも、くたひれともなく、た
ゝとろくゝとぞ、まどろみ給ひける

そのとき、このあるしの人、ゆめうつゝともなくの給ふやう
なんちは、みもせぬおやを、かほとまでこひかなしみける事
の、むさんさよ、かうくゝの心さし、まことにせつなるによ
り、たゞいま、まほろしにきたれるなり、なんち、いまは
ゝのたいなひにありしとき、このはりまなきさにて、としは
二八の春のころ、くまかゑかてにかゝり、うたれしなり、わ
れをおもはゝ、けうやうに、いかにもよくくかくもんをし
て大ちしやとなり、ひろくしゆしやうをさいとあれ、それを
うれしとおもふへしとて、たもとに、一しゆの歌をそ、かき
をきたまひける

こひくゝてまれにあふよもゆめなれや、うつゝにかへる身
にしあらねは

わかきみは、ちゝこにあひまいらせ給ふ事のうれしさに、

ひしくおもひ申、かもの大みやうじんへまいり、百日いのり
ければ、あらたにれいむをかうふり、あしにまかせてまよひ
申なりとぞ、のたまふ、あつもりきこしめして、やがてたふ
れふし、なきたまふ

やゝありて、おきあがりて、なくくせうじん小人の手をとり、ひき
よせて、めしたる物の雨にぬれたるを、ぬきかへさせたまひ
て、ほとくゝと、いだきつかせたまふ

あつもり、仰有けるやうは、むざんや、なんぢは、いまだ見
ぬちゝを、かほどにおもひけるこそ、あはれなれ、なんぢ、
たいなひにして、七月と申に、一の谷のかせんに出、くまが
へが手にかゝり、十六のとうたれて、此八ねんがあひだ、
たしやうのくげん申はかりなし、まことに、なんぢ心ざしあ
らば、ぜんごんをして、あつもりがごしやうにえさすべしと
ぞ、のたまふ

そのときわかきみ、さては我ちゝにてましますかとて、なの

いかにちゝこと、のたまひて、御袖にとりつかむと、したまへは、ゆめはそのまゝそ、さめにけり

めならずよろこびて、とりつき給ふ

そのうち、あつもりのたまふやう、我ことをかほどにおもひ給ふべからず、なんぢかんたんをください、いのり申心ざしをかもの大みやうじん、あはれにおほしめして、ゑんまわうにおほせありて、せつなのいとまをこひて、今なんぢにみゆるぞ、かまへて今よりのち、わがことをかほとに思ふべからずと、のたまふ、わか君おほせけるは、ゑんまわうに仰ありてみづから御前に参るべし、ちゝは是より、みやこへ御のほりありて、みづからが母に、いま一たびみえさせ給へと、申されければ、あつもり御なみたをながし、宣のたまふやう、あらむざんやな、むまれてよりしてこのみちは、さなきだになごりおしきならひぞとて、かみかきなで、なみだをながし、の給ふやう、わかぎみは、さてこれより都へはのぼるまじきとて、りうていこがれ給ひけり、あつもりおほしめしけるは、こゝろよはくてかなふまじ、ことにときうつり、いかゞせんとおほしめしけり、わかぎみは、いまだならはぬたびのくたびれに、あつもりのひぎをまくらとして、すこしまどろみ給ふ、さる程にあつもり、なごりのおしさは、かぎりなしと思へども、よきつあでと思しめして、心つよくなして、こしよりやたてをとり出し、若ぎみのひだりのそでに、一しゆのうたをあそばして、扱ゆきては帰り、かへりては行、なごりをぞおしみたまふ、さてあるべきにあらざれば、かきけすやうに

このあとは、目が覚めると父の姿はなく、若君が枕にしていたのは、苔むした膝の骨であった。若君は泣く／＼その骨を頸に掛けて都へ上るというのである。敦盛が残した歌は、御伽草子本ではこの後の方に記されているが、それは『何なげくこやのいくたの草枕、露ときえにしわれなおもふそ』となっていて、絵巻の前掲引用文の中にある歌とは大分異なっている。

右に対照した所を見ると、前半は敘述の筋は大よそ同じで、御伽草子本の方に省筆されている部分があるが、後半は逆に御伽草子本にのみ、敦盛父子の会話を中心とした特有の記事が見られる。ところでこの後半の敦盛の言葉の中にある、傍線を附したBの部分は、謡曲の「生田敦盛」に次のような類似の語句がある。

さても御身孝行の心深き故、賀茂の明神にあゆみを運び、夢になりとも我が父の、姿を見せてたび給へと、祈誓申す。明神憐みおはしまし、閻王に仰せつかはさる。閻王仰を承り、暫の暇を賜はるなり。(日本名著全集本に拠る)

これと比較すると、御伽草子本のBの部分は、この謡曲の語句と何らかの関係がありそうに思える。もし、室町物語としての「小敦盛」が謡曲「生田敦盛」によって成ったものであれば、御伽草子本のこの部分は、絵巻よりも古態を存していると言うことが出来よう。だが、この敦盛父子対面の場面全体の構成を見ると、絵巻の方が遙かに自然である。絵巻で、若君が縁行道をしている人にいたわられているうち、旅の疲れからとろ／＼とまどろむと、夢の中でこの人が尋ねる父であることを明かし、嬉しさに袖にとりつこうとすると夢が覚め、その人は消え失せていたという風に叙べているのは、物語の技法として巧みである。御伽草子本のように、敦盛が現実の間で若君と散々語り合った後、『ときうつり、いかゞせん』と思ひ、若君がやつとまどろんだのを『よきつゝめでと思しめし』で、消え失せると

いうのでは、亡霊の引込むきっかけを無理に作った感があって、物語としては甚だ拙劣な書き方と言わねばならぬ。そこで考えられるのは、絵巻に拠って御伽草子本の本文が製作された際に、この場面については、謡曲「生田敦盛」を参照し、その詞章をも取り入れて増補したのではないかということである。そのために、物語にはふさわしくない能がかりの手法が入ってきて、右のような不自然な敘述の形になったのではないだろうか。

この場面の前半にある絵巻の文の中で、御伽草子本には欠けている、傍線Aの部分を見てみよう。若君が平家の末と名告ることをためらいながらも、父のためならば命も惜しくないとして、思い切って素姓を明かすというこの記事は、この場合の若君の心理を写すものとして適切な文である。御伽草子本の、何の躊躇もなく名を挙げる書き方は、そちらの方だけで見ていけば、不自然という程ではないけれども、絵巻と対比して見ると、筆を急いだための表現の不備が感じられ、前に検討した五個所の場合と似通った性質の関係が認められる。この点からも、この段もやはり、御伽草子本が古態を示すというよりは、絵巻の如き古本の改訂（それは甚だ拙劣な改訂であるが）と考えた方が良さそうに思えるのである。

三

前章において、御伽草子本は、絵巻或はその系統の本を拠り所にして、それを改訂したのではないかという一応の仮説を立ててみた。そこで次に、両者の本文を比較して、その間に果して直接の関係があるのか否かを検討してみなければならぬ。既に、前掲の敦盛父子対面の場の両者の文章にも、敘述の運びや言葉遣いの上に、かなりの類似が見られたが、そのような個所は外にも随所にある。主な所を次に対照して掲げてみる。上段は絵巻（慶応本）下段は

御伽草子本である。

(イ)敦盛の北の方が若君を生み、源氏の探索を恐れて捨子をする条

いかなる山のおく、いはのはさまにも、そたてをき、あつもの御かたみにも、こらんせはやとは、おほしめしけれどもへいけのすゑときぬれは、いかにいときなきをもさしころし、たいないまでもさかすそかし、人のうへともおもほえず身つからさへうきめをみん事、あさましくおほしめして、しろきあわせにつみ、したん^Aのつかのかたなをそへ、なくなく、しもまつといふところにそ、すて給ひける

そのおりふし、ほうねんしやうにん、くまかゑの入道をさきとして、御てしたちひきくして、かもの明神へ御さんけいありけるか、しもまつへんにて、おさあひこの、なくこゑのしければ、きこしめして、御こしをよせ、御らんすれば、いづくしきわかきみをそ、すてをきてありける

上人、これを御らんして、きぬにつみ、かたなをそへて、すてたるは、いかさま、たゞ人とおほえず、たすけよとの事にてそあるらん、又は、かもの明神の、御りしやうにもやとて、とりあげ、下向ありて、めのとをそへてそ、そたて給ひける

(ロ)法然上人が若君のゆかりの者を尋ねるために、諸人を集めて説法を述べる条
せつほうも、なかはになりしかは、上人、すみそめの袖をかほにあて、なみたをなかし、の給ふは、みなくちやうもん

さる程に、いかなるところにも、あづけをき、かたみに見ばやとおほしめせ共、平家のすゑをば、かたくさがし出し、十さい以後はくびをきり、二さい三さいをば水にいれ、七さい八さいをばさしころす、人のうへさへかなしくおもひけるにみづから此わかきみをとられ、うきめをみんことも、かなしきやとおほしめして、あはせにさしまきて、ゑんたん^Aづかのかたなをそへて、なくく、さかり松にぞ、すてたまふ

折ふし、ほうねん上人、御でし十余人を引つれて、かもの大明神へ御まいりありけるが、さがり松にて、おさなきもの、なくこゑをきこしめして、たちより、御らんずれば、いづくしきわかきみにて、ましますなり

ほうねん上人、御らんじて、ふしぎや、かたなをそへ、きぬにまきて、すてけるやうは、たゞ人にては有べからず、いか様^{さま}これは、かもの大みやうじんの、御りしやう也と、よろこびて、ひろいたまひ、御げかうありて、めのとをそへ、いづきかしづき、そだて給ふ

其時しやうにん、やがてなみだをながし、御衣のそでをぬらし給ふ、やゞ有て、のたまふやう、此なかのちやうもんの人

の人々、きこしめせ、いとせ、かもの大みやうじんへ、まいり候へしやさん申つるに、下松のへんにて、おさなひ人をひろいて候、いまははや、八さいになり候まで、そたて候ところにてこのほど、このちこ、見ぬちはを、恋候て、かなしみなけき、物をもくはず、ゆみつをものます候て、いまはいのちも、あやうく候、もし、ちやうもんの人々の御中に、このちこのゆかりをも、しろしめしたる人も、御入候は、たとひ^Bへいけかたの人にても、御わたり候へ、くそうかとりそたて申、しゆつけになし申候うへは、六はらへわひ事申、くるしくも候まし、このまゝにて候は、すてにむなしくなり候はんも、ふひんに候と、のたまひて、さめくとなきたまへはしるもしらぬも、袖をぬらさぬは、なかりけり

右の両者の文を較べると、はつきり同系と言ひ得る程近くはないが、敘述の順序が細かい所までおおそ一致している上、同じ語句が断続的に両本において使われていることが認められ、全く無関係とするには類似が多すぎるといった現象を呈している。しかし、類似点だけを恣意的に取り上げて、関係づけてみても無意味であるから、両者の本文の中から、違ふ所を取り出して考えてみよう。

前掲(イ)の文の中の傍線Aの語句を見て頂きたい。御伽草子本の『ゑんたんづかのかたな』については、市古博士も「日本古典文学大系本」の頭注で未詳とし、「つかは柄で、刀の柄の一種であろう」とされている。ところが、絵巻ではこれが『したんのつかのかたな』となっている。絵巻には別の個所に『したんのいゑに入たる笛』という語も見えていて、『したん』は紫檀であろう。紫檀の柄の刀ならば意味がよくわかる。御伽草子本の『ゑんたんづか』は、

々、きこしめせ、いとせ、かもの大みやうじんへ、まいり候とき、さがりまつにて、おさなきものをひろひ、めのとをそへ、そだて候が、七さいにまかり成候が、此ほど、なにとやらん、ちはをこひて、けふ七日があひだ、物をも喰ずゆ水をさへのみ給はず、はや、ぞんめいふぢやうにて候、このちやうもんのなかに、ゆくゑをしろしめされたる人や御入候、おさなきものに、ゆくゑを知せて給はりたる事ならば、^B何かはくるしかるべき、明日になり、六はらへ聞え、へいけのすゑなればとて、ころし給ふとても、くるしからず、ゆくゑを知せて、心やすく、ころしてたひ給へと、おほせもあへず、御ころもの袖をぬらしたまふ、見る人きく人、ともになみだをながし給ふなり

故意に尤もらしい造語をしたのかもしれないが、あるいは、「志」の草仮名を「忍」と誤って、こういう語を造ったと考えられないであろうか。

また、(四)の文の終りの方の傍線Bの部分は、絵巻と御伽草子本では敘述の内容が違っている。御伽草子本では「たとえ若君が平家の末であつて、六波羅へ聞えて殺されることになつても構わないから、両親の行方を知らせてやってくれ」という意味になっているが、法然上人の言葉としては、いかに目前の若君の命を救う一時凌ぎとはいへ、甚だ無慈悲に聞える文である。絵巻のように「平家方の者でも、自分が出家をさせて六波羅へ訛事を申せば、子細はあるまいから」という言い方が、遙かに適切であろう。意味がこれ程違つていながら、文章の外形には似通つた所があるというのは、どうも御伽草子本が、絵巻のような文を見ながら、それを不注意にか、あるいは故意にか、書き改めたためではないかという気がするのである。

右のように、御伽草子本の本文のみでは、意味がよく通らなかつたり、不自然に聞えたりする部分が、絵巻の該当部分と照してみると或程度の解決がつくという所は、外にも幾つか見出される。それを次に列挙して考えてみる。

四

(1)いたはしやあつもり、げんじむほんをくはたて、みづからは、いかならんあづまおとこにみなれ給ひて、あつものがことをば、
わすれこそ候はんずらんと、たはふれたまひけり

御伽草子本の巻頭の部分で、北の方が夫敦盛の死を聞いて伏し沈み、敦盛が都を落ちるに際しての別れの時の言葉を、回想している所である。日本古典文学大系本の頭注に「『げんじむほんを』以下『候はんずらん』までを括弧に

入れてみるとよい」とあるが、その部分を敦盛の言葉とすると、『みづからは』という語は北の方を指しているのであるから、敦盛の言葉の中に、北の方の側からする言い方がまじってしまったて、甚だ論理的でない文になる。また、右の頭注に「あるいは源氏が謀叛をくわだてた際にの意か」とも疑っておられるように、『げんじむほんをくはたて』の語も、下との続き工合が悪い。絵巻のこの部分は、御伽草子本とは叙述の仕方が大分違っているのであるが、右の文に当る所を抜き出してみると、

もしわれ、このたひのかつせんに、うたれて候は、あつまの人にみえ給ひて、われくか事はは、おもひさへ出し給はしなとて、たはふれ給ひ

となつてゐる。これならば、敦盛の言葉として完全な文章であり、意味は明瞭である。御伽草子本の右の文も、これと同じ意味のことを言っていることは確かであろう。

(2)さて、此ちごのたまふ様、われは、ちゝはゝもなき、みなし子にて有けるを、しやう人、とりあげさせ給ひて候と、申されければ、ちかづく法師、このことをとがめばやと、おもへ共、今更いのちうしなふに及ばずして、しんしやくしけり

若君が法然上人の許で生活している時の記事で、この前は、熊谷入道が若君の敦盛に似ているのを見て、涙を流すことが記され、この後は、若君が父母の無い悲しさを、上人に訴えることが記されている。前後と照してみても、若君が何故『われは、ちゝはゝもなき云々』の言葉を述べるのか、よくわからないし、特に『ちかづく法師』以下の句は意味が判然としない。前記の頭注でも「以下意味がはっきりしない。まわりの法師が、児の両親のこと（父が敦盛であること）を、とがめだてしたいと思うけれど、（敦盛の子ならば殺さねばならないが）今更殺すまでのこともないといので、さしひかえていた、という意か」と述べられているが、そうした苦しい解釈を余儀なくさせる文であ

る。絵巻には右の文に当る叙述は無く、丁度その部分に、第二章の(3)に挙げた、弓遊びの記事がある。(一七九頁参照) その文は、

さても、このせうしん、おなしやうなるちこたち、あつまりて、ゆみあそひし給ひけるに、あるちこ、かちまけのあらそひをして、の給ひけるは、ちゝはゝもなきみなしこか、われ／＼にむかひて、くちをきく事よ、上人とりあけさせ給ひてこそ、か
くはあれと、のたまへは、かなしく、くちおしくや、おもひけん、ゆみやをすてゝそ、なかせたまひける

というものである。前の御伽草子本の文は、これとは全く別のことを述べているとしか考えられないであろうが、この絵巻の文の中で傍線を附した句は、御伽草子本の方にも見出すことが出来る。そこに一脈のつながりを考え得る余地がありそうなので、当っているかどうかは甚だ危惧がもたれるが、次のような解釈を試みてみたい。御伽草子本では『われは、ちゝはゝもなき、みなし子にて有けるを、しやう人、とりあげさせ給ひて候』という句が若君の言った言葉となっているが、絵巻では、これに当る『ちゝはゝもなきみなしこか、われ／＼にむかひて、くちをきく事よ、上人とりあけさせ給ひてこそ、かくはあれ』の句は、若君の遊び相手の稚児が、若君に向って言った言葉になっている。もし、前者も後者と同様に、発言者が若君でなく、外の児であると仮定すると、この言葉の意味がわかってくる。次の『ちかづく法師』以下の文も何とか解釈がついてくる。すなわち、外の児が若君に向って「お前は父母もない孤児であったのを、上人が拾って下さったんだぞ」と言っているのを、まわりにいた法師が聞いて、その児をとがめだてしようと思っただけでも、という意味になる。(たゞ次の『今更いのちうしなふに及はずして、しんしやくしけり』は大袈裟過ぎる感があるが、このことが世間に聞えて、若君の素姓に不審がもたれることを恐れて、そこまで考えたとすれば、理解はつこう。) もし、このような解釈が許されるとすれば、御伽草子本のこの部分も、やはり絵

巻の系統の叙述が頭にあつて、それに引かれて書いたのであるが、表現が不充分であつたために、こういう不明瞭な文章になつたとすることが出来ると思ふのである。

(3) さる程に、御うちのくまがへにうだう、申やう、六さいのとし、せつほうの御とき、としのよはひ、はたちばかりの上らうの、ようがんびれいに御わたり候が、十二ひとへに出立いでたちたる御かたの、此小人せうじんをめして、あひし侍りけるか、人めしげければ、さらぬやうにもてなして、帰らせ給ひけるを、見まいらせてこそ候へと、申ければ

若君が父母恋しさに湯水も飲まず、命も危く見えたので、上人が弟子達に、若君のゆかりについて何か心当りはないかと尋ねた時、熊谷入道の答えた言葉である。この文はこのまゝでも意味の上で不都合の個所は無く、御伽草子本だけ見ていれば、問題は起らないのであるが、この所を絵巻で見ると、

そのとき、くまかへ入道、申けるは、まことに御いたはしく候、おもひいたしたる事の候、毎月、六さいの御せつほうの御とき、としのほと、はたちはかりなるねうはうの、いかにもゆふなるか、ちやうもんにまいり、人めをつゝむけしきにて、かのおさなひの、かみをかきなてゝ、心のかきり、なき給ふ、人めのしけきときは、さらぬていにて、けかう候ありさま、あやしく候よし、申ければ

とある。両方に『六さい』という語が出てくるが、御伽草子本は「六歳」の意であり、絵巻は「六齋」（六齋日のこと）の意味である。絵巻には、後の場面にもこのことが出てくるが（一九五頁の絵巻引用文参照）、そこに見られるように、毎月六齋日の説法の座に欠かさず連らなつて、我が子の成長をよそながら見守つていたとある方が、子を思う親の情をあらわす叙述として遙かにすぐれている。これに較べれば、御伽草子本のように、若君が六歳になつた時、母が突然現れたとするのでは、六歳ということの必然性が薄く、不自然さを感じざるを得ない。そこで、こゝも絵巻の本文にある『六さい』の意味をとり違えて、御伽草子本が「六歳」としたものと考えれば、その理由が解ける

ように思う。

(4)むぎさんやなんぢは、父母といふ人もなし、みなし子にて有しを、この愚僧が、いま迄そだてをきぬるぞ、かやうにいふことを、汝がちゝはゝとも、おもふべし

(3)の文の少し前に出てくる、上人が、父母の無い悲しさを訴える若君をさとす言葉である。『かやうにいふことはを』以下の句は、これでも一応わかるような気はするが、自分の言葉を父母と思えというのは、よく考えると、どういうことなのかはつきりしない所が残る。絵巻はここが、

むさむやな、なんちには、ちゝはゝもなきすてこにてありしを、われくやしなひ、そたてたれば、たゝ、わらはをちゝはゝと、おもひ候へとそ、のたまひける

とあり『ことのは』が『わらは』となっている。これならば意味分明である。『わらは』と『ことのは』とでは、僅か一字の一致しかないので、(3)の『六さい』の場合程はつきり断定することは難しいが、御伽草子本の「ことのはを父母と思え」というような気分的な表現の出てきたもとは、やはりこの絵巻の『わらは』という語にあったのではないか。『わらは』が上人の自称として不適當なのを感じて、よく考えずに『ことのは』という語に置き換えたのではないかと、想像したい気が起きてくる。

(5)みづからをば、いかなるものとか、おぼしめす、御はづかしなから、大しやうのにうたう、しんぜいのためには、まごのつぼねのいもうと、ならのないでんとは、みづからが事なり

法然上人の説法の座に現れた、敦盛の北の方が、自分の素姓を述べる言葉である。市古博士は、『大しやうのにうたうしんぜい』は「あるいは少納言入道信西のことか」とされ、『ならのないでん』は未詳とされている。絵巻のこの部分には、

(A)さて、身つからは、こせうなこん、のふきよのゆかりに、へんのないしと、申物にて候

とあるが、前述のように、絵巻にははじめの方にも、北の方の素姓を記した文があつて、そこでは、

(B)さて、せうなこん入道しんせいの、御まこ、とうあん御むすめ、へんのさいしやうと申けるは

となつていて、少し違つている。(A)の方の文で『のふきよ』とあるのは、(B)の方で『しんせい』とされているのに照すと、『しんせい』に「信清」という字を連想し、これを訓読して『のふきよ』としたのではなからうか。ともかく絵巻では、「少納言入道」としているので、信西のことを考えていたことはわかる。御伽草子本の「大将の入道」も、絵巻に照してみれば、やはり信西のことで、それを良い加減に書いたものと思われる。『ならのないでん』はどうもわからないが、これも絵巻に『へんのないし』とあるのと、何か関係がありはしないか。単なる読み違いかもしれないし、あるいはまた、うがち過ぎの謗を受けるかもしれないが、『ないし』に内侍、典侍という字を思い起して、「内典」という語をこしらえたのではないかといった想像も起させる。いずれにしても、これは出鱈目な造語なのである。うが、そのきっかけは絵巻の『へんのないし』にあつたのではないかというのが私の考えである。

(6)さて、やうくさんのひもとときしかば、みれば、あつもりにすこしもちがひ給はぬ、男子なれば、いづくにもかくしおき、かたみにみばやと思へども、へいけのすゑをば、かたくさがし、とり出し、おとなしきをば、くびをきり、いとけなきをば、水にいれ、二たび物をおもはする、なげきの中の、よろこびなり

これも(5)の少し後に出てくる、北の方の言葉である。ここでは、終りの『二たび物をおもはする、なげきの中の、よろこびなり』の句が、前の句から飛躍して、意味が通じ難い。「日本古典文学大系本」の頭注では、一応「前に夫を失つて悲しみ嘆いたのに、また、わが子を殺されはせぬかと、二度物思いをさせられる。しかし、子が生れた

のは、夫を失った嘆きの中の喜びだ。」と訳し、このあとに「しかしわが子を生かすために、捨てたのです」というような文が略されている、という風に解されたが、「あるいは『二度物を思はする』それ故に、わが子を捨てたが、今こうして会うのは嘆きの中の喜びだという意か。なお『水に入れ』の次に脱文があるのかも知れない」とも疑っておられる。ここは絵巻の文章を見ると、

このわかきみ、あつもりに、すこしもたかひたまはねは、かくしをき、御かたみにもと、おもひ候しかとも、へいけのすゑをは、たつねいたし、くひをきり、はらのうちまてさかすと、うけ給候程に、ふたゝひうきめを、み候はん事も、なさけなしとて、おもひかね、なみたなからに、すて候つるを、上人とりあけさせ給ひ、御てらへ御いり候を、見いれまいらせて、かへり候しなり、それより、この八かねんかあひたは、毎月六さいの御せつほうには、一ともおこたる事候はてまいり、このわかきみをみまいらせ候に、日にそひ月にそひ、いよくあつもり御おもかけに、にまいらせ候へは、かへらぬむかしも、こひしくおもひ出られて、そゝろになみたをなかし候つる、おもひあまるおりふしは、かくとも申たくは候つれとも、人めをしのふ世の中なれば、心のうちにをしこめて、なくく下向申候つると、かきくときの給へは、おほくのちやうしゆも、おのく、なみたにむせはぬはなかりけり

と、極めて丁寧に叙べてある。御伽草子本の文章の、『二たび物をおもはする』までは、この文のはじめ、傍線を附した部分に当るわけで、絵巻の『ふたゝひうきめを、見候はん事も、なさけなし』の句に照すと、やはり「夫を失つた上に子供までも殺されて、二度の物思いをさせられる」の意味であることは明らかである。そこで次の『なげきの中のよろこびなり』の句も、その内容は、絵巻の『おもひかね、なみたなからに、すて候つるを』以下の文に相当するのではなからうか。そうすれば、この句は「二度の物思いをさせられるよりはと思つて、わが子を捨てたのです、こうして上人に取り上げられて立派に成長しているのを見ると、夫に死に別れ、子に生き別れた嘆きの中の喜びです」の意として、この場面に適切な解釈をすることが可能になる。絵巻では『毎月六さいの御せつほうには、一と

もおこたる事候はてまいり云々』と北の方が述べているが、御伽草子本は、(3)に記した如く、六歳の意味にして前を書いたために、この言葉を省略して、『なげきの中のよろこびなり』という抽象的な句で済ませてしまったのではないか。この場面の両者の本文は、御伽草子本の方が余りにも簡略になり過ぎていたので、右のように関係づけることは強弁に過ぎる嫌いもあるが、この『なげきの中のよろこびなり』の句は、御伽草子本ではもう一個所、若君が敦盛の遺骨を携えて帰った時の、

さて、御うたを、はゞごぜんに、まいらせられ給へば、あつもりの、日ごろあそばしたる御手なり、わかれの時の御おもかけ、今みるやうに思はれて、二たび物をおもはする、なげきの中のよろこび也

の文にも使われていて、同本が好んで用いた慣用句であつたらしいのである。従つて、絵巻に叙べてある如き、多くの句を費すべき、北の方の複雑な心情を、この簡単な類型の句に押し込めて、平気な顔をして通り過ぎるといった、粗雑な表現の手法も、相当程度考え得る可能性をもっていると思われるのである。

ちなみに言えば、この作品の御伽草子本には、右のような類型句を繰り返して使う手法は、外にも見ることが出来る。たとえば、『りうていこがる』という句は、この一篇の中に五回も使われ、『天にあふぎ地にふして』という句は二度用いられている。また、『みればいつくしきわかぎみにてましますなり』の句が、北の方が御産の紐を解いた所と、法然上人が下り松に捨てられた赤児を見つけた個所とに、繰り返して使われているが、この二個所は近接しているので、前者の如き慣用句という程のものではないが、表現についての無神経さを感じさせる。絵巻はここを、前の方は『さもいつくしき、わかぎみにておはします』後の方は『いつくしきわかぎみをそ、すてをきてありける』と、似通つてはいるが、少し言い方を変えているし、『流涕こがる』『天に仰ぎ地に伏して』『二度物を思はする、嘆きの中

の喜びなり」といった慣用句は全く使っていない。この点を見ても、御伽草子本の表現は、相当に安易なものであることが知れよう。

五

この作品の全般に亘って、以上の如く、絵巻と御伽草子本との、新旧二種の伝本を比較対照してきた結果を総合すると、両者の内容、詞章には、多くの繁簡や異同が見られるにもかかわらず、そこには一つの共通した性質を認めることが出来るようである。すなわち、叙述内容に関する面では、御伽草子本における記事の欠脱や、同一場面についての叙述の相違には、結果として、絵巻よりも文学的価値の低下を将来したと考えさせる傾向が認められ、また、詞章に関する面においても、御伽草子本の、幾多の意味不明の語句や、意図を理解し難い態の表現は、大部分、絵巻の相当個所と照合することによって、その誤解や、安易な省略乃至改訂とする時、最も妥当と考え得る解釈が成立するということである。勿論、絵巻と御伽草子本との間には、なお幾つかの本が存在したことを想定すべきであろうから、御伽草子本の本文が、はじめに掲げた三種の絵巻の中の何れかに拠ったとは、早急には決められない。しかしながら、ここでは管見の現存資料のみについて言う外は無いので、私は、本稿に挙げた多くの事実を通して見られる右のような現象によって、御伽草子本「こあつもり」の本文は、絵巻系統の室町期の本文に直接基づいて作製されたものと考ええる。しかも、その本文作製に当たっての態度が相当に安易なものであることは、前述した如くである。ここには、御伽草子本本文の作者の教養の程度を窺うことが出来ると思う。

横 笛 草 紙

一

本作品の古鈔本には、左の二本が存する。いずれも室町後期の書写と推定される古本である。

(一) 京都清涼寺蔵絵巻 二軸

茶色絹布地織文表紙。見返し金切箔散し。料紙楮紙、天地截断、紙幅二四・二糎。字面高さ約二十二・五糎。外題、内題共になし。箱に「滝口縁起」と題す。本書はもと絵入の冊子本であったのを、卷子本に改装したものである。挿絵十四図。濃彩色であるが古雅で、近世の極彩色の奈良絵本に見られる如きあくどさが無い。奥書無く、箱書に「嵯峨三宝院住物／元禄八歳亥七月吉日／施主森道伴」と記されている。本書の本文は、前述の「源平物語集」に翻刻される予定である。

(二) 慶応義塾図書館蔵写本 一冊

縹色表紙（二六・一×二〇・六糎）。楮紙袋綴。表紙左肩に「横笛物語」と標題した題簽を附す。この題簽の筆者について、表紙見返しに「横笛外題中院通茂公」と書いた附箋が貼ってある。（通茂は宝永七年、八十才で卒）内題、奥書なし。字面高さ約二三糎。二十一丁半、十一行、各行二十字内外。本文は極めて闊達な筆遣いである。濁点が多く附され、また、所々字句を抹消して傍に訂正したり、脱字を書き入れたりした

個所があるが、それらの濁点や書き入れの字は、本文と墨色を異にする。本書の本文の引用に際しては、濁点はそのまま残し、脱字を補った書き入れの字は「」に括って、本文中の相当個所に挿入した。また、本文中の抹消された字は「」で囲い、訂正の書き入れを六ポイント活字で傍記した。「」の中を空白にしたのは、抹消された元の字の読み得ない部分である。

次に、江戸期の伝本としては、左の五種を見ることを得た。

- (三) 神宮文庫蔵写本 半一冊 (内題「よこふえたきくちのさうし」。「源平物語集」に翻刻予定)
- (四) 国会図書館蔵写本 大二帖 (題簽「よこふへ」。絵抜本)
- (五) 天理図書館蔵奈良絵本 大一冊 (内題「横笛滝口草子」)
- (六) 御伽草子本
- (七) 明暦四年山田市良兵衛刊本 大一冊 (国会図書館蔵)

内題「よこふえたきくちのさうし」。匡郭、四周单边(二五・五×一八・一糎)。柱刻なし。刊記「明暦四年戌九月吉日 山田市良兵衛開板」。十三丁、十四行、各行約二十五字。挿絵三頁。

外に、川瀬一馬氏の「日本書誌学之研究」に、元和頃刊古活字本(三井文庫旧蔵)が、「龍門文庫善本書目」に、江戸初期写奈良絵本が、夫々紹介されているが、未だ調査の機会を得ていない。また、野村八良氏は「室町時代小説論」の中で、「昭和十一年十一月発行の弘文荘待賈古書目を披閲すると、此の草子の奈良絵本の異本が紹介せられてゐる。其に拠ると、本文は甚だ簡素で、原型に近い物の由で、文と歌との両者に亘って流布本との距離が甚だしく、畢竟流布本には後人の加筆が多いとの事である。して見ると、さう云ふやうな古本が夙に行はれてゐて、次第に流布

本の形態に迄推移したのであらう。」と述べられているが、かかる本も見ることが得なかつた。なお、中野莊次氏の許で、「合状」と合綴になつた綴葉装の江戸前期写本を見たが、これは、内容本文共、前掲諸本とは全く別系統のものであるので、ここでは暫く除外する。

二

管見に入つた右の諸本について、御伽草子本を中心に、その本文を見ると、(一)(二)の古写本とはやや遠く、それに対して、(三)(四)(五)の江戸期の諸本とは極めて近い関係にあることが認められる。特に(四)(五)は御伽草子本と全く同じと言つてよく、特記すべき特徴を有していない。そこで、(一)(二)の古写本と対比する前に、(三)(四)の二種の伝本との関係を検討してみる。

まず、御伽草子本と明暦二年刊本との本文の相違する個所を挙げると次の通りである。断片的に本文を引用しなければならぬので、検索の便宜のために、日本古典文学大系本の頁数と行数を下に記しておく。

御伽草子本

明暦板本

(1) 其御こゝまつどのゝ御うち

その御こまつどのゝ御うちに

(三四六頁
第十一行)

(2) 身を押のけて出たるかたち

身をおしのけていでたるそのかたち

(同
第十三行)

(3) あきの田のかりそめぶしのみなりともきみがまくらを見るよし
よしもがな

あきのたのかりそめぶしのよなりともきみがまくらを見るよし
もがな

(三四七頁
第一行)

(4) 埋火とはこがれて物思ふの心也

うつみ火とはこかれてもの思ふ心なり

(三四八頁
第十六行)

(5) 御面かげのわすれがたくて

(三四九頁 第九行)

(6) 殊更わりなきは此こひの道とこそ申侍る

(同第十三行)

(7) 用ひずかよひ給へれば

(三五〇頁 第十二行)

(8) ほめぬ人こそなかりける

(三五二頁 第六行)

(9) よるひるのつとめひまなくこそ聞えける

(同第十一頁)

(10) 道さだかにみへね共

(三五三頁 第九行)

(11) ぎんのかゑをしらべ

(同第十一頁)

(12) つやを申てよもすから

(三五四頁 第一二行)

(13) 申やうこそ哀也

(同第二行)

(14) かなはぬ事をかなへさせ給ふこそ、かみや仏ほとけのちかひ也と

(同第十四行)

(15) 昔にかはらで、いまもちぎらんといはゞこそ、かかはりしすがた、たゞ一めみせさせ給へと

(三五六頁 第四行)

(16) 是迄たづねてまいり

(同第九行)

(17) せめてはこゑなりとも

(同第十五行)

(18) 終つるに身をこそなげにける

(三五八頁 第五行)

(19) あれよくとよばれど、ほどとをければ、終つるにはかなくなりけり

(同第七行)

御おもかげのわすれがたくて

ことさらわりなき此こひのみちとこそ申侍る

もちひずかよひたまひければ

ほめぬ人こそなかりけれ

よるひるのつとめひまなくこそ聞えける

道はさだかにみえね共

ぎんのかゑをしらへ

つや申よもすから

申やうこそあはれなれ

かなはぬ事をかなへさせ給ふこそ、かみやほとけのちかひなれと

むかしにかはらで、いまもちぎらんといはゞこそ、かかくあらめすがた、たゞひとめみせさせ給へと

これまでたづねまいり

せめて声なりとも

つるに身をこそなげにけれ

あれよくとよばれど、ほどとをければ、かかなはず、つるにはかなくなりけり

(20) ちかごろあはれなる事をこそ、たゞいまみて候へ

ちかごろあはれなる事こそ、たゞいま見て候へ

(同第九行)

(21) もし横笛なるらんと

もしもよこぶえなるらんと

(同第十二行)

(22) わがいのちのあらんかぎりはこそ、をばとふらひ申へし

わかいのちのあらんかぎりわこそ、をばとふらひ申へし

(三五九頁第十五行)

(23) かやうにこそあるべけれとて

かやうにこそは有べけれとて

(三六〇頁第七行)

以上で全部である。(1)は明暦板の明らかな脱字であり、(4)(6)(10)(12)(16)(17)(20)(21)(23)は助詞が一字あるか無いかの違いで、文章としてどちらが良いとも言えない。(2)は『その』を挿んだ明暦板の方が、文章として整っていると言えよう。(3)の歌は『みなりとも』でも意味は通せるが、明暦板の『よなりとも』の方がわかり易い。それにこの所は、前記の古写本二種をはじめ、他の諸本すべて『よなりとも』になっている。これは御伽草子本が、「よ」の仮名「与」の草体を「ミ」と読み違えたのではないかと思われる。(8)(9)(13)(14)(18)は、いずれも文法上の係結びに関係しての相違であるが五箇所すべて明暦板の方が文法に叶っている。もし両者の本文の先後を言うならば、御伽草子本の文章の文法上の誤りを、明暦板が意識して正したとするのが妥当ではなからうか。(但し、(6)のように正していない箇所も見られるが)(5)と(7)は助動詞の使い方に関する違いで、(5)は、助動詞「らる」を挿入した御伽草子本の方が、この場合の表現としては適切であるように思われるが、その用法が違っていて、正しくは「わすれられがたくて」となるべき所である。(尤も、この種の誤用はしばしば見られるが)明暦板が『わすれがたくて』としたのは、あるいは、やはりそういう文法上の誤用を気にしたことかも知れない。(7)は、文法的にはどちらも誤りではないが、どちらかと言えば、完了の助動詞「り」を使うよりも、回想の助動詞「けり」を用いる方が普通であろうから、これも明暦板の意識しての訂正と考え得る。

(11)の御伽草子本の『ぎんのこゑ』については、「日本古典文学大系本」の注に「吟、あるいは琴の誤りか」とある。明暦板の『きんのすゑ』は「琴の末」の意であろう。この前の文は『つり殿三さうまんのあらしのをのづから』とある。『まんのあらし』は恐らく「まつのあらし」の誤植であろう。松を吹き渡る風のこと、それならば、吟よりも琴の方が良さそうである。それに他の本を見ても、清涼寺本が『きんのねをやしらむらん』、慶応本が『ことおしらへて』、神宮文庫本が『ことのすゑのしらべ』と、皆琴の意にしている所からして、御伽草子本が誤って濁点を附したものと思われる。ただこの場合、御伽草子本と明暦板の二者のどちらを先とすべきかは、早急に断定し難い。

(15)と(19)はこの二本の間で、最も大きな相違のある個所である。(15)は、滝口の籠っている庵室を尋ねた横笛が、庵の外から、姿を見せようとしぬい滝口に向って口説く言葉の一部である。御伽草子本の『いまもちぎらんといはゞこそ』の句は、「今も夫婦の契りを結ぼうというのなら、貴方が会わないのも尤もであるが、そうではないのだから」という意味で、次の『かはりしすがた、たゞ一めみせさせ給へ』の句との間には、文章法上の省略がある訳である。明暦板でこの二つの句の間に『かくあらめ』の句を挿入しているのは、上の条件句に対応する句を補って、文章として完全な形にしようという意図があつたからだと解せるのではなからうか。(その代りに『かはりしすかた』の『かはりし』が省かれたのは、やや表現を粗雑にした趣が見えるが)(19)は、横笛が千鳥が洵へ身を投げる所を向岸から見ていた山人のことを書いている個所である。これも「向岸なので、『あれよく』と呼ばわったけれども、どうすることも出来なくて」の意であるから、明暦板のように『かなはず』の句のある方が、文章として完全な表現をなしている。この(15)と(19)の場合、御伽草子本の方が明暦板の語句を省略したという見方も成り立つが、前の係結びの例と合せて考えると、文法に相当に神経を使っていた明暦板が、省略句を補入したという過程を想定した方が、妥当のような

気がする。それと、この個所を清凉寺本と慶応本の二古本で見ると、(15)は、『いままたちぎるといはゞこそ、かへしすかたをたゞ一め、なにしにまみへたまはぬぞ』(慶応本。清凉寺本にはこれに当る句なし)、(19)は、『あれくよはわれとも、つるにはかなくなりけり』(清凉寺本。慶応本にはこれに当る句なし)とあって、いずれも御伽草子本と同じ文章形式であることも、右の想定を助けるであろう。

(22)は、御伽草子本の『あらんかぎりは』の「は」が「わ」になっているという違いだけである。明暦板の仮名遣いの誤りと見れば、それだけのことであるが、「あらん限りは、後世をば」と「あらん限り、我御前をば」の違いと見ると、意味が全く異ってくる。(御伽草子本は『こぜ』となっているが、これは濁点のつけ違いで「こせ」であろう)明暦板は濁点が割合丁寧に附されているので、『わごせ』と清音にしている所からして、どうも前者と考えた方が良さそうなのであるが、一方、明暦板は助詞の仮名遣いも大体正確に守っているので、あえて後者の如き見方も成立する可能性のあることを示したのである。もしそうであるとすれば、明暦板から御伽草子本への転化の過程は考えにくく、その逆と見るのが至当であろう。ちなみに、慶応本では、『こせう』(後生)となっていて、やはり御伽草子本に近い。(清凉寺本には該当の語なし)

以上、両本の語句の異なる個所全部に亘って検討を加えてみた。御伽草子本と明暦板とが相互に直接の関係をもっていたのかどうか、すなわち、どちらかが他方の本文に基づいて複製したのかどうかという点は、今はっきり断定するに足る傍証を発見し得ない。しかし、両本の本文の異同が、右に挙げただけのものであることよりして、ごく近い関係に立つものである点は認められよう。その場合、右に見てきた如く、両者の本文の相違個所の大部分に亘って、明暦板の方に、文章の文法上の不備を訂正するという一貫した態度が窺われることによって、御伽草子本の本文の方

が先出であつたと考えたい。

三

次に、御伽草子本・明暦板本と同系の本文であるが、やや相違する所の多い、神宮文庫本について検討してみる。この本と、御伽草子本・明暦板本の両者とを比較すると、そのどちらに近いといふことは言えない。前掲の二つの板本の相違する個所について見ても、(1)(4)(5)(6)(12)(13)(14)(18)(21)は御伽草子本と一致し、(2)(3)(9)(10)(16)(23)は明暦板と一致する。残りの(7)(8)(11)(15)(17)(19)(20)(22)は、どちらとも異なる個所である。その外、御伽草子本と明暦板とは同じで、神宮文庫本のみ異なるという個所が相当にある。全部を挙げることは煩雑であるから、語句の末の小異は省いて、著しい個所のみを摘出すると左の通りである。

御伽草子本

(1)行す^{をこなひ}ましてゐたりけり、たき口が心のうち、ほめぬ人こそなかりける

(2)笈^{かひひ}の水の絶々に、かけてもならひぬ煙にそめなし、うき世の事を観じつゝ、いとゞ哀ぞ増りける

(3)かくとだにもしりたらば、のゝすゑ、山の奥なりとも、おなじ道にいるならば、はちすのえんとなりて、さこそはうれしからましと、てんにあこがれ、ちにふし給ひし、そのふせい、たとへんかたもなかりけり、余^{あま}の思ひにたえかねて

神宮文庫本

おこなひすましてゐたりしを、ほめぬ人こそなかりけり

(三五二頁
第六行)

かけひのみつのたえくに、うきよの事をくわんじつゝ、いとどあはれぞまさりける

(同
第八行)

かくとだにもしるならば、のゝすゑ、やまのおくなりとも、おなじみちにいるならば、さこそうれしからましと、てんにあこがれ、地にふして、あまりのおもひにたへかねて

(三五三頁
第三行)

(4) 誠に尋わひたるとうちみえて、しばのちに立そひて、しつ
くとしたる有さま也、いにしへの有様に、なをまさりて
ぞ覚えける

(5) むざんやよこぶえが、みとせ斗ばかりのなさを忍びて、尋きた
るころさし、何にたとへん方もなく、たもとをかほにを
しあて、なくより外の事そなき

(6) なさけなの有様や、昔にかはらで、いまもちぎらんと、い
はゞこそ、かはりしすがた、たゝ一めみせさせ給へと

(7) 是迄たづねてまいり、ふさいは二世のちぎりと、聞しかど
今生こんじやうのたいめんさへかなふまじきか

(8) うたてのたきぐちやとて、こゑもおしますなきければ、た
きぐち是をみて、あまりなげくもいたはし、せめてはこゑ
なりとも、きかせばやと思ひて、かくなん

あづさゆみそるをうらみとおもふなよ、まことのみちに
いるぞうれしき

(9) あれよくとよばれど、ほどとをければ、終にはかなく
なりにけり、かくて山人は、たきぐちのあんじつのまへを
とをとて、友人ともにかたるやう、ちかころ、あはれなる事
をこそ、たゝいまみて候へ

(10) さてもけさ、わうじやうみんにて、しほのあみとをへだて
つゝ、此人はそと、われはうちにて、もだえこがれしあり

まことにたつねわびたるありさまにて、しばのちにたちそひて
しづくとしたるふぜいこそ、いにしへのかたちには、なをま
さりてぞおぼへける (三五五頁 第三十二行)

むざんやなよこぶえが、三とせはかりのなさをしのびて、た
つねきたるころさし、なにゝたとへんかたもなし (同 第三十六行)

なさけなのありさまや、かはりしすがた、たゝ一めみせさせた
まへと、くどきつゝ (三五六頁 第四行)

これまでたつねまいりたるに、なさけなくも、あはじとのたま
ふ、うらめしさよ、ふうふは二世のちぎりと、きゝしかど、こ
んじやうのたいめんさへかなうまじきか (同 第九行)

うたてのたきぐちやとて、こゑもおしますなきければ、
あづさゆみそるをうらみとおもふなよ、まことのみちに
いるぞうれしき (同 第十四行)

あれよくとよばはれと、ほどとをければ、ちからなし、かの
やま人は、たきぐちのあむじつのまへをとをとて、たゝいま
かゝるあはれなることを、見て候へ (三五八頁 第七行)

さてもけさ、わうじやうみんにて、もだへこがれしありさま
を (三五九頁 第三行)

さまを

(11)あだなるも、つれなきも、いのち、うきにかぎらぬならひ
かや

あだなるも、つれなきも、いのちある、よのならひかや

(同第六行)

(12)さて、いにしへのすがたはつきはてて、軒をてらざるゆ
ふがほの、花のいろこそかなしけれ

さて、ゆふかほの、はなのいろこそかなしけれ

(三六〇頁
第二行)

(13)みやこちかくすめはこそ、かやうのことをばきゝ給へ、お
ほせなきそのさきにとて、よこふえがためにとて、かうや
さんに上りつゝ、あんしすましてゐたりけり

みやこまちかくすめばこそ、かかる事をばきゝ候へ、おほせな
きそのさきに、よこぶゑがためにとて、かうやさんにのぼりつ
ゝ、あんじすましてゐたりけり

(同第十行)

(14)神宮文庫本には卷末に、御伽草子本・明暦板に無い、滝口の父母が我が子の出家を嘆く記事がある。(その文は後に掲げる)

右に列挙した例を見ると、神宮文庫本の方が、御伽草子本よりも文章が簡略になっている個所の多いことが認められる。(1)(2)(3)(5)(6)(8)(10)(12)の八例がそれである。この八例については、どちらの本文が良いとも言切れる程の材料が見出せない。この二本のみの比較では、省略したために意味が通じ難くなったとか、増補したために文脈に不合理が生じたとか、はっきり言うことが出来ないのである。そこで右の個所を、この両本よりは書写の年代の遙かに古い清凉寺本・慶応本との比較において考えてみたいと思う。未だこの二種の古写本の本文との関係について何らの立証をも行っていないので、便宜に過ぎる方法かもしれないが、その点は暫く看過して頂きたい。但し右の八個所のうち、清凉寺本に、相当する文のあるのは(1)(2)のみである。従って自然慶応本との比較が中心になるが、その慶応本の文は次の如くである。

(1)おこなひすましていたりけり、たき口が心のうち、ほめぬ人こそなかりけり(「清」)おこなひすましていたりけり、心のうち、おしはかられてあはれなり)

(2) かけひのみづの、こゑく^(マ)に、かけてならさぬあらすだれ、しばのあみ戸に、松のはしら、かうのけふりにそめほ^なして、うき世の事おくわんずるに、よろずのいにしへの事おのみ、いまさらおもひ出されて、いとあわれぞまさりける(「清」かけひの水の、たえく^くに、かけてならわぬあしすたれ、しほのあみ戸に、竹はしら、おもひいて、いとあはれそまさりける)

(3) かくあるべきとおもひなは、野のすへ、山のおくなり共、同事^{おな}みちに入たらは、一つはちすのゑんとならば、さこそはうれしからまじと、天にあふき、ちにふし、あくがるゝありさま、たとへんかたぞなかりける、あまりのおもひにたゑかねて

(5) むさんやよこふへか、三年あまりのなさけとしたひ、ふみもならわぬさとのみちお、たつねてきたる心さし、なにゝたとゑんかたぞなき、出あひて、一めみへはやと、せんたびもゝたび、おもへども、うたてしのわか身やと、心に心をからかひて、なぐよりほかの事ぞなき

(6) なさけなのたきくちや、いにしへのことく、いままたちぎるといはゞこそ、かへしすかたを、たゝ一め、なにしにまみへたまはぬぞ

(8) うたてしのたきぐちやと、あみどのきはにたをれふし、こゑもをしまずなきければ、たきぐち、これをきゝ、あまりのおもひにや、たゑかねて、もたへこがるゝありさまは、なにゝたとゑんかたぞなき、あまりにみれば、むざんさに、しばし心をとりにをし、こゑなりとも、きか「せ」ばやとおもひて、なかめければ

あづさゆみそるをうらみとおもふなよ、まことのみににれるわか身を

(10) さても、わうじやうるんにて、しばのあみどをへたて、人はそと、われはうちにて、たへこがれたるありさま

(12) いにしゑの、はなのすがたはきゑはてゝ、のきばをてらす夕^{がほ}の、花のいろこそてらしけれ

右の如く、慶応本には八例のすべてに亘って、御伽草子本にあって、神宮文庫本には欠けている語句が、そっくり同じではないが、類似した形で使われている。御伽草子本と神宮文庫本とは、全体として見れば、詞章の末端に至るまで大部分一致していて、明らかに同系の本文である。そこで、慶応本の如き古写本が、たまく神宮文庫本に無く御伽草子本にある語句を備えているという事実は、もし慶応本が、御伽草子本系統の本文の源流の中に位するもの

であることが立証されれば、この両本の本文の先後関係を推定する一つの材料を提供するものと言うことが出来る。すなわち、御伽草子本が、神宮文庫本の本文に拠って、語句の増補を行ったという関係は考えにくいのである。次に、右以外の(4)(7)(9)(11)(13)(14)の六例を、やはり慶応本を参照しつつ検討してみる。

(4)は、文章としては同じであるが、用語に相違が見られる。御伽草子本には、「有様」という語が接近した個所に繰り返し使われていて、語彙の乏しさを感じさせるのに対して、神宮文庫本は『ふぜい』『かたち』という別の語を用いて、変化をもたせている。その意味では、後者の方が文章として良いと言えよう。慶応本は、

まことに、たつねかねたるふぜいして、しばのあみ戸に□ちそいて、しおくとしたるありさま、いにしへのおもかけにも、
なおまさりてそおほゆる

とあって、やはり用語に変化がある。しかも、用いた場所は逆であるが、『ふぜい』『ありさま』は神宮文庫本と同語である。従って、この個所に関しては、神宮文庫本の方が慶応本に近く、前の場合とは反対の現象を呈している。

(7)は、神宮文庫本の方に、御伽草子本には無い句が挿入してある。御伽草子本は『是迄たづねてまいり』と『ふさいは二世のちぎりと、聞しかど』の二句の間の続きが悪く、市古博士の注でも「尋ねて参ったのだ」と、ここで文が一度終止したものととして解釈されている。神宮文庫本の文だと、そのような文脈の上の不備が無い。慶応本はここが、
これまでたつねまいりたり、そのうへ、ふさいは二世のちぎりと、きゝしに、いきてたに、たひめんのかなふまじきか

となっていて、神宮文庫本の如き句は無い。しかし慶応本では『たつねまいりたり』と、ここで文が終止して、新たに『そのうへ、ふさいは』云々と、文を起しているの、続き工合には、御伽草子本のような不都合は見られない。従って三本を並べて考えれば、この場合は、慶応本の文に誤脱が生じたことよって、御伽草子本の文となり、更に

その誤脱を新たに補った所に、神宮文庫本の文が成立したと見ることが、最も自然の過程と思われる。

(9)は、前に御伽草子本と明暦板との比較の(19)に掲げたのと同じ個所である。そこにおいて考えた如く、御伽草子本の文は飛躍があり、明暦板はそれを補うために、『かなはず』という句を挿入したのであるが、神宮文庫本は『終にはかなくなりけり』を省いて、そこに『ちからなし』の句を置き換えた態となっている。『ちからなし』であれば、上の『ほどとをければ』という条件句との意味の対応にずれがなく、『終にはかなくなりけり』の句は欠いても、言外にその意味を感じることが出来るから、これでも文としての難は無い。ここも清涼寺本は前掲の如く(二〇四頁参照)、御伽草子本と同様の形であるので、やはり神宮文庫本が、明暦板とは別の方法で、御伽草子本の文を改訂したとすることが出来る。また、同じくこの文で、神宮文庫本には『友人にかたるやう』の句が欠けている。そこで、同本では『たゞいま、かゝるあはれなることを、見て候へ』以下の山人の言葉が、庵室の中に居る人に対して話しかけているものようにとれるが、この言葉の後に御伽草子本と同じく『とも人もこれをきゝ、あはれなる事かなと、なみだをながして、とをりける』とあって、やはり友人との会話であったことがわかるので、前に『友人にかたるやう』の句の無いのは脱文とすることが出来る。慶応本にも『かへるきこりの、ともにゆきあひて』(「清」やまひと、たきくちかあんしつのみへをとをとると、たひ人に申やう)という句がある。

(11)の御伽草子本の文は、意味を明確に解することが出来ない。市古博士は「はかないのも、つれないのも人の命だ。命はつらい悲しいというだけではないものであるか」と注をつけられている。原文は『あだなるもつれなきも。いのちうきにかぎらぬ……』となっているのを、句読点を改めて、右のように解されたのであるが、やはり落ちつかない感じが残る。神宮文庫本の『いのちあるよのならひかや』の方が、意味が通るが、慶応本は、

あだなるも、つれなきも、うき世の人のいのちにて、とゞめたり、うきにはきゑぬならひとて

となっていて、これならば文意は明瞭である。従つて、ここも(7)の場合と同じように、御伽草子本が誤脱によって不完全な文章にしたのを、神宮文庫本が再び改訂して合理化したものと云えないであろうか。

(13)の『きゝ給へ』と『きゝ候へ』の相違は、後者の方が文法として正しい。「聞く」という動作は滝口自身のことであるから、当然尊敬語でなく謙讓語を使うべき所である。また、御伽草子本が「とて」という助詞を、二度重ねて使っているのは、やや耳障りである。これも神宮文庫本の方が良い文章ということになるが、慶応本は、

みやこちかきところにすめばこそ、かゝる事をきくやとて、おほせいだされぬさきに、よこふゑのためとて、……

とある。「聞く」については、慶応本は補助動詞を附していないので、両本の間隔を考える材料とならないが、「とて」の方は、場所は違うが、慶応本には、やはり近い個所に二度用いられている。御伽草子本の「とて」の重用も、あるいは慶応本との関係からきているのではないか。

(14)の、御伽草子本に欠けていて、神宮文庫本に存する巻末の文は、清涼寺本と慶応本にも存在している。まず、詞章の近い慶応本と対照して、神宮文庫本の本文を掲げる。

慶 応 本

さて、ちゝもりより、此事をきゝつけて、かくあるべきと、
しるならば、いかなるものと、ちぎるとも、何しにふきやう
をなすべきそとて、天にあふぎ、ちにふして、もたへこかる
ゝありさまを、なにゝたとへんかたもなき、のゝすゑ、山の
をくなりとも、わか子のたきくちが、あらん所をきくならば
たづねゆきなんと、あけくれなげきけり、さてたきくちは、

神宮文庫本

さるほどに、ちゝはゝ、もたへこがれし御ふせい、なにゝた
とへんかたもなし、のゝすゑ、山のおくまでも、わがこのた
きくちの、あるときくならば、たづねゆかんと、かうやさん
にのほりつゝ、あんじつをつくり、ほうだうあんとぞ申ける
一もんの人々も、かうやのたきぐちひじりとて、よにたつと
くそ申ける

かうやさんへのほり、あんじつをつくりて、ほうとうあんんと
 そ申ける、一もんふつうの人なれとも、たきくちひじりと申
 て、世にたつときとそ、世はなれけれ(マ)

神宮文庫本の方が、文章が節略されているが、両者には類似した語句が多く見られ、直接とは言えなくとも、何らかの繋がりのあつたことが想像される。ただ、神宮文庫本では、傍線の『あけくれなげきけり、さてたきくちは』の句が無いために、滝口の父母が高野山へ上つて庵室を造つた意味になるが、終りの、一門の人々が高野の滝口聖と呼んだという文は、滝口入道の事を叙べているのであるから、叙述の対象が途中で断り無しに変わってしまったという不明瞭さが見られる。しかし、平家物語の南都本・源平盛衰記に、滝口入道が高野の宝幢院梨坊に住んだという記事があるのに照すと（平家物語には、滝口の父母が高野山へ上つたという記事は無い。なお、平家諸本の横笛説話の異同については後述する）、神宮文庫本には誤脱があつて、『かうやさんにのほりつ』以下の文は、滝口のことを述べているものと考えた方が良さそうにも思える。一方、清涼寺本は、この所を次のように叙べている。

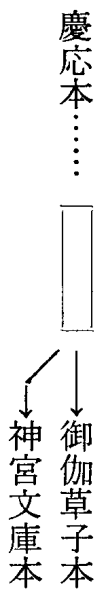
さる程に、ちゝもちより、此事をきゝて、かくあるへしと、思ひなは、いかなる物を、かたらふとも、何しにふけうをすへき
 そと、こうくわひせんはんにて、たゝなみたに、むせふはかりなり

さて、たきくちは、かの木の上に、かけしきぬを身にそひて、もちけるとかや、たもとにいれし一ふての、我かもとへめぐりきて、なかきかたみになる事と、かへすくもかなしけれ、ひまゝくには、とりいたしみるときそ、たゝいまぬしに、むかへる心ちして、すみそめの袖をぬらしける

ちゝ、このたきくちか、ありときゝしより、かうやさんにのほり、あんじつとたゝて、ともにしゆつけを、とけたまひけるとかや、ほうとうりとて、一もんの人々、よにたのもしく、たつとくそ、おほへける、おこないすまして、よこふへと、一つはちすのゑんと、うまれんと、ふつくわをとけたまひけるとかや

この文では、明らかに滝口の父が共に高野山へ上ったとしている。ただ、『おこないすまして』以下の末尾の文は、父親だけに関する叙述としてはおかしく、少くとも滝口のことをも含めて言っているものとしなければならない。しかし、この叙述は、父親よりも、むしろ滝口のことを叙べるのにふさわしい言葉と受け取れるので、清涼寺本の文も途中に誤脱があるのか、あるいは、不用意のうちに、途中で主語を転換させてしまったので、『ほうとうりとして』以下は、滝口のことに関する叙述ではないかといった疑問を起させる。清涼寺本の本文は、右の引用を見てもわかるように、はじめに滝口の父のことを書き出しながら、間に、滝口が横笛の形見の衣を身に添い持って、泣いていたという、脇道に逸れた記事を挿入するなど、甚だ叙述が錯雑しているので、途中で対象になる人間が変ること位は、充分に考え得られる所である。しかし、ともかく滝口の父もまた、高野山へ上ったとする語り方があったことは事実なので、神宮文庫本の文が、慶応本の如きものの誤脱から生じたと、一概には言ってしまう所が残っている訳である。ところで、いずれにせよ、この個所においては、神宮文庫本は御伽草子本より古態を存している如くに見え、(4)の例と共に、他の個所とは相反する事実を提供しているのである。

以上、御伽草子本と神宮文庫本との、主なる相違の個所を、慶応本を参照しつつ比較してきた所を総合すると、御伽草子本の方が先出であろうと考えさせる材料の方が、圧倒的に多いことが知られる。しかし、(4)と(44)の例の如く、神宮文庫本の方が慶応本に近い個所も存在するので、単純に、慶応本……御伽草子本→神宮文庫本の過程を想定することは躊躇される。強いて両者を関係づけるとすれば、



のような系譜を想像するのが、最も無難であろうか。ともかく、神宮文庫本から御伽草子本の本文が成立したとする過程は、一応否定し得るとして良いであろう。

四

前二章で見てきた所によって、管見の範囲内では、江戸期の伝本の中には、御伽草子本に先行すると確実に認め得る本文を有する本は伝存しないと考えられることが、ほぼ明らかになった。そこで、これまでの推論に恣意的にしばらく引き合いに出してきた慶応本・清涼寺本の二本と、御伽草子本との、本文の関係について次に考察してみたい。これまで、前二者の本文を部分的に引用したが、それによって、御伽草子本は慶応本と関係が深く、清涼寺本とはかなり離れていることが、印象づけられたと思う、事実その傾向が強く、結論としては結局その程度のことしか言い得ないのであるが、この三本を全体に亘って組織的に比較すると、なお、かなり複雑な問題が含まれているのである。「小敦盛」の場合と同じく、詞章の関係は後回しにして、まず叙述内容の上での三本の異同を較べると、次のような相違が見られる。

(1) 御伽草子本は巻頭に『けんれいもんゐんの御とき、かるも、よこぶえとて、二人の女はう侍りはんべけり』とあり、刈藻は越前の前司盛嗣と最愛して下つたと叙べている。慶応本はこれと同じ内容であるが、清涼寺本は『かるも、かるかや、よこぶへとて、三人のわらはあり』とし、刈藻は越中の二郎兵衛と最愛して下り、刈萱には『おういそのくんにんゆきふさ』が通つたと叙べている。なお、慶応本にはこの記事の前に、
それ、げんじ女三の宮は、かしわぎの右衛門のかみになれたまひて、かほる大しやうをうみたもふ、しがでらのしやう人は

きやうごくの宮す所をこひたてまつり、ねがわくは、たへなる御手ばかりをたまわり候へと、六十四年のきやうほうをむなしくなして、三がいるてんしたまふも、むやうのこひのすへなり、見るこひ、きく恋、うらむこひ、あふてあはぬ恋こそ、中くよしなけれ、あしからの大みやうしんも、こひせばやせぬへしと、うらみたまひけるとかや

という一文が添えられているが、これは、この物語と直接の関係のない、主題に入る前の枕の文であるから、除外してよからう。

(2)慶応本と清涼寺本は、横笛の素姓を津の国神崎の遊君の娘とする。御伽草子本にはこの記事は無い。また、清涼寺本のみは、この記事に続いて、横笛の出生についての長い挿話を語っている。その出生譚というのは、「神崎の長者『しゅう』(侍従の意であろう)が鞍馬寺に詣り、良き夫を合わせてたび給へと祈請した所、みぞろ池のほとりで逢った男に契りをこめよとの夢想を蒙る。果して、十六七の優なる殿上人に逢い、居所を教えて帰る。それより男は夜なく侍従の許へ通うが、素姓を明かさないので怪しみ、男の狩衣に糸をつけた針を差し、その跡を辿ってゆくと、みぞろ池に至った。池のほとりで躊躇していると、かの男が現れ、我はこの池に住むこと七年に及ぶ大蛇で、汝の胎内に人の形を留めたが、もし女子ならば土に埋めよ、我は汝の差した針の毒のために命も終りになったと告げ、形見に青葉の笛を残して姿を消す。やがて侍従が生んだ子は女子であったが、土に埋めるに忍びず、かの笛にちなんで横笛と名づけ、捨子にする。横笛は成長の後、平清盛に見出され、上童として進ませられることになった」という内容である。

(3)父の不孝に逢って出家を思い立った滝口が、横笛との最後の夜を過して立ち出でる際、形見にとて、それとなく笛を置き忘れてゆく記事が、三本共にある。その後で、清涼寺本では、横笛が滝口の遁世を伝え聞いて悲しむ所に『一ま所へ入てみれば、かのふへを忘れると、おもひしに、かたみにのこしをきけると、おもふこそ、中く

物うけれ、なみたにむせふはかりなる』と記され、また慶応本には、滝口が横笛の許を立ち出でた後に、『其後、よこふゑお見つけ、これはわすれて出たまふと、おもひて、御たつねあらは、取かくしふくと、おもひて、いたりけり』と書かれている。御伽草子本には、形見に残した笛のことについて、そのあと何の記事も無い。

(4)横笛が建礼門院の内を忍び出で、滝口の庵室を尋ねて行く道で、仏の前に通夜をして、滝口に今一目会わせて賜われと祈念をこらすと、今生の対面は叶わぬとの夢中の告げを受ける場面がある。清涼寺本は、これを釈迦堂でのこととするが、慶応本・御伽草子本は虚空蔵菩薩（おそらく法輪寺を指すのであろう）の前でのこととする。但し慶応本は、其処を立ち出でてから、更に釈迦堂にも立ち寄って祈念したという記事がある。

(5)既に、神宮文庫本との比較の場において挙げたが、巻末に、清涼寺本には、滝口の父も高野へ上つて共に出家したという記事が、慶応本には、父が滝口の出家を聞いて悔み嘆いたという記事が、夫々載せられている。

ところで、右のような記事の出入異同について、三本の関係を考えるに当って、参考資料としなければならないのは、室町物語としてのこの作品の成立に、重要な関係をもっていたと想像される、平家物語の中の横笛説話である。周知の如く、平家物語は、維盛の出家の記事に附随して、滝口入道の発心の由来をなす、横笛との恋物語を載せているのであるが、この説話には、平家の諸本の間で種々の異伝が現れている。私は平家諸本の調査は甚だ不充分で、今手許で調べ得たのは、語り本の系統では、一方系の源流をなす覚一本として日本古典文学大系所収本、八坂系として国民文庫本、また読み本の系統では、四部合戦状本（慶応義塾図書館蔵本）、南都本（彰考館蔵本）、南都異本（同）、長門本（国書刊行会本）、延慶本（大東急記念文庫蔵本）、源平盛衰記（有朋堂文庫本）の、都合八種であるが、説話内容の比較としては、この程度でも一応主なものは尽してあると思う。

上記諸本の間に見られる記事の異同は、かなり複雑に入り組んでいるが、最も大きな相違に視点をおいて分類すると、滝口との再会を果さなかつた横笛の末路について、(イ)出家して奈良の法華寺に住み、其処で死んだとする説と、(ロ)入水して自殺したとする説との二通りになる。語り系二本と南都本は(イ)であり、他の諸本は(ロ)である。(イ)においては、高野山へ上った滝口入道が、法華寺の横笛の許へ

そるまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に入ぞうれしき

の歌を送り、横笛はこれに対して、

そるとてもなにかうらみんあづさ弓ひきとむむべき心ならねば

と返歌をする。一方、入水説をとる(ロ)にあつては、当然かかる歌の贈答は無い訳であるが、長門本と延慶本には、これと同系の歌が別の場面に出てくる。すなわち、長門本では、滝口よりの消息の絶えてしまった横笛が、三条の館に行き滝口のことを尋ねると、内から『そるまでも頼しものをあづさゆみ誠の道に入ぞうれしき』と書いた扇が投げ出され、これを見て滝口の出家を知るといふ記事がある。第二句が変わっているが、これが前記の滝口の歌と同じものであることは明らかである。また、延慶本には、往生院の庵室の場面で、滝口と横笛が、庵室の内と外とから前の二首の歌をやりとりしたことが叙べられている。

しかし、ここで注意すべきは、延慶本は横笛の死を自殺とするのであるが、他本のように、往生院の庵室よりの帰途入水するのではなく、一度出家して、東山清岸寺に住み、その後桂川に投身したとしていふことである。つまり延慶本には、出家説と入水説との両方を折衷した跡が認められるのである。そこで考えられるのは、『そるまでは』『そるとても』の二首の歌は、入水型の方には本来は無かつたのが、延慶本は出家型の伝をも取り入れたために、それに

伴なつて、この二首が別の場面に入ってきたのではないかということである。長門本の場合も、出家型の方においてこの歌が有名になつていたので、それを取り入れるために、独自の趣向を構えたと言えるのではなからうか。長門本の前記の記事には、何となく筋の運びの上での不自然さが感じられるのは、そのためであろう。源平盛衰記は入水型で、二首の歌は無いのであるが、異説として附載した出家型の伝（同本では、横笛は髪を下し雙林寺に在つたとする）の方には、この二首の異伝と思われる、

しらま弓そるをうらみと思ふなよまことの道にいれるわがみぞ　（滝口）

しらま弓そるをうらみと思ひしにまことの道に入るぞうれしき　（横笛）

という歌が記されていることによつても、右の推定は確められるように思う。

ところで、室町物語としての「横笛草子」は、諸本いずれも入水型の内容をもち、しかも、右の二首の歌（語句には変化があるが、同一の類型に属する）が、往生院の庵室の場面での滝口、横笛の贈答の歌として載せられている。この点は延慶本と一致する訳であるが、延慶本のように、一度出家したとはせず、往生院からの帰途、大井河に投身したとするのである。その他、延慶本には、滝口の出家を、日頃懇意にしていた嵯峨の聖が諫めることや、往生院から高野へ上る間に、南都東大寺の永観律師のゆかりの庵にしばし足を留めることなど、この本独自の増補と見られる記事があるが、室町物語の方には、それらが無い。逆に、前掲の横笛の素姓を神崎の遊君の娘とすることと、往生院を尋ねる道すがら、仏前で通夜をすることは延慶本に無く、長門本・盛衰記に見られる所で、特に後者は長門本に近い叙述内容を有している。従つて、室町物語としての本作は、特に延慶本に基づいたとは言い得ない。ただ、最も大筋とすべき点において、語り本系の諸本、及び南都本とは離れており、他の読み本系の諸本、なかならず後期の増補

にかかる長門本・延慶本・源平盛衰記と交渉が深いと言うことが出来よう。

ここでもう一度元へ戻って、前掲の清涼寺本・慶応本・御伽草子本との相違点を、平家諸本を参照しつつ検討してみる。

(1) 四部合戦状本と延慶本は、刈藻・横笛、長門本と盛衰記は、刈萱・横笛の、夫々二人の名を挙げ（他の本は横笛の名のみしか記さない）、いずれも、刈藻あるいは刈萱には、越中次郎兵衛（盛衰記は越中の前司盛俊とする）が関係を結んだとしている。すなわち、横笛の外のもう一人には、刈藻と刈萱という二種の異伝があったことが知れるが、清涼寺本が刈藻・刈萱・横笛の三人の名を挙げたのは、その二種を、両方共取り入れた訳で、その結果、「大磯のくんになゆきふさ」の如き、新しい人物を出してきたのであろう。なお、刈藻を最愛した人物を、清涼寺本は「マシゑん中の二郎兵衛」とし、慶応本は「マシゑつ中のせんしもりすへ」、御伽草子本は「越前のぜんじもりつぐ」とする。清涼寺本は四部合戦状本・長門本・延慶本と一致し、慶応本・御伽草子本は源平盛衰記に近い。ただ盛衰記に「越中前司盛俊とあるのは、次郎兵衛盛嗣（盛継、盛次とも書く）の父のことである。慶応本の『もりすへ』は何かの誤りであらうし、御伽草子本の「越前の前司盛嗣」は、父子の官名と人名が混乱した上に、越中を越前と誤っている。このように両本とも記述が不正確であるが、前司としたのは、盛衰記の記事と何らかの関係があるのかも知れない。

(2) 横笛を神崎の遊君の娘とするのは、長門本と盛衰記にある。特に長門本には「神崎の君の長者の侍従が娘也」とあって、清涼寺本の『しゅう』という名は、これと関係があるろうと思われる。御伽草子本にこの記事が無いのは、長門本と盛衰記以外の諸本と一致するが、前述の如く御伽草子本も平家の後期増補系諸本と、主要な筋においては交渉の深いことが明らかなので、この点のみ古態を残すとは考えられず、新しい省略とすべきであらう。また、長門本

・盛衰記は、清盛が京と福原の間の往還の砌、横笛を召具して内へ進らせたとしているが、これも清涼寺本には踏襲されている。ただ、清涼寺本の横笛出生譚のみはどの本にも見られない。この話は前記の内容からしても、この物語には何ら必要のない、極めて室町物語的な荒唐無稽の一挿話であることが明瞭であるが、左の、横笛が捨子にされてから清盛に見出される過程を語る文を見れば、それがほんの思いつきの挿入に過ぎないことは一目瞭然と言えよう。

そもく、ちゝかゆいこんを、たかうへきともあらされは、いとあはれなるみとり子を、りやうもんけんしやうのつちにうつまん事、かなしかるへき事なれば、とにかくに、こらうやかんもとらはとれ、その名をかたとり、よこふへと名をつけ、すてければ、やかて、みわの山、すきゆくとしをかそふれば、十にあまりて、いまははや、十五の年、おむろの御所へまいりけりその比、入道しやうこくは、ふくわらのみやこへ、しゆらくのありしとき、かんさきに、一夜しゆくして、かのよこふへを御らんして、むさうのひしんなりとて、うへわらはのために、まいらせらるゝ

十五の年御室の御所へ参つたと言いながら、その次に、清盛が神崎で横笛を見出したというのでは、どういふことなのか理解出来ない。あるいは、御室の御所へ参つたのは、横笛の母の方なのかも知れない。それならば理屈は合うがそれにしてもこの二つの文の間には飛躍があり過ぎる。ここに、はっきりした継ぎ貼ぎの跡が見られるのである。

(3) この記事は、平家の諸本には見えない。滝口が形見に残した笛に関しての、後の処理の仕方としては、清涼寺本が一番適切であろう。慶応本の文は『とりかくしふくとおもひて』の所に誤脱があるのではないかと思われ、意味がぼやけているが、それはともかく、此処にこういう文があつても、清涼寺本のように、滝口の出家を聞いた時に、その笛が形見のつもりで残したものであつたことを知る叙述が無ければ、余り意味が無い。この個所について、清涼寺本と慶応本との関係は何とも言えない。御伽草子本にどちらの叙述も欠けているのは、もし御伽草子本が清涼寺本と関係をもつのであれば、書き忘れたとすべきであらうし、慶応本と関係をもつのであれば、不要の叙述である故に

省略したか、あるいは慶応本が思いつきで書き足したかの、いずれかと考えられよう。

(4) 長門本には、法輪寺の虚空蔵菩薩の前に終夜の祈念をこめると、『汝が夫妻は是より北の谷に、柴の庵を結びてある也、此世の対面うすかるべし』との告げがあったと記している。盛衰記も同じ場所で祈念したとあるが、仏の夢想のことは記さない。また南都本には『今夜ハ釈迦堂ニ通夜シ明シテ、又尋ユク程ニ』という簡単な記事が見える。これと照合すると、御伽草子本は長門本と一致し、清涼寺本は、内容は長門本に、場所だけは南都本に近く、慶応本は長門本と南都本とを合せた形ということになる。しかしながら、南都本は、横笛説話に関しては語り本系とほぼ同じ形を備えていて、室町物語との関係が薄いので、釈迦堂という場所の一致は単なる偶合かも知れず、この点によつて、清涼寺本の方を古態とは決め難い。

ところで、この個所における記事の異同が生じた理由については、次のようなことが考えられないであろうか。それは、右の如き場所の相違は、夫々の本に伝えられる異伝を管理していた人々との関係によつて生じたのではないかということである。すなわち、釈迦堂での夢想を語るのは、それが清涼寺関係の人々の間に伝えられていた故であり虚空蔵菩薩の奇瑞とするのは、法輪寺関係の人々の手にそれが管理されていたがためではなかったかという事情が想像されるのである。盛衰記では、滝口が出家して籠った庵室を法輪寺の内として、往生院の名を全く出していないがこれになれば、いよ／＼滝口の旧跡を自院の内としようと思図した、法輪寺関係の説話管理者の口ぶりが窺えるようである。この点は、長門本・延慶本も疑問のある書き方をしている。長門本は、滝口が『生年十八の年俄にぼだい心を起し、嗟峨なる所にて出家して、往生院と云所に行ひすまして有けるに』と、明白に往生院の名を出しているのであるが、その後で横笛が庵室を尋ねて行く条では、法輪寺で前掲の如き夢想を受けた後、『夜もほの／＼と明けしか

ば、示現のごとくに北の谷に行きみければ、滝口があんしつと覚しくて、云々』とあって、その場所をはっきり示していない。往生院は、方角としては法輪寺の北に当るから、これでも差支えは無いものの、両者の間には桂川があつて、距離としてはやや隔っているのである。長門本の書き方では、滝口の庵室は法輪寺にごく近い所にあつた如くに感ぜられる。横笛が庵室から立ち戻る際の叙述も、『さて横笛法輪寺をばよそにみて、梅津の里へと行しが』とあるだけで、桂川の対岸に渡っていたような気配が無い。延慶本になると、この矛盾がもつとはっきり出てきて、『生年廿五ニシテ本鳥ヲ切り、出家シテ、西山嵯峨ノ尺迦堂ノ辺、法輪寺ノ内、往生院ト云処に閉籠テ、行澄テ居リケリ』と書いている。往生院を法輪寺の内とするのはおかしいのであるが、これは延慶本の癖で、滝口の隠栖の場所を往生院とする説と、法輪寺とする説とを統合した結果ではなからうか。この延慶本の記事と照して考えると、長門本も、盛衰記と同じく滝口隠栖の場所を法輪寺とする伝に拠りながら、往生院の異伝をも取り入れたために、はつきりしない書き方になったのではないかと思う。つまり、長門本・延慶本・盛衰記の三本の横笛物語には、法輪寺系統の伝承が影響を及ぼしていると考えられるのである。室町物語の慶応本・御伽草子本も、その意味ではこれと同系統に属し一方、法輪寺が全く出てこない清涼寺本は、別の系統の説話管理者の間に伝えられたものと見ることが出来る。ただその場合、慶応本には釈迦堂の記事も出てくるのは、どのように解釈すべきであろうか。室町物語としての原型は、清涼寺本系統の伝承であつて、慶応本は長門本等の伝によつてそれを改訂しながらも、なお釈迦堂の名のみを残したとも考えられるがそこまで論理的に跡づけるのは行き過ぎかも知れない。

(5) は、平家物語の方には、どの本にも該当する記事が見られない。室町物語とは最も関係の薄い、一方・八坂両系の語り本、及び南都本には、終りに父も滝口の不孝を許したということだけが記されている。あるいはこれを布衍

して、室町物語が独自の増補を行ったとも考えられる。この場合も、御伽草子本にこの記事が無いのは、増補される前の原態を存するものとするよりも、既に増補された形態を再び省略したものと考えの方が常識的であることは、(2)の例と同様である。

右の如く、記事の内容から比較した上では、室町物語の三本に見られる異同と、平家諸本のそれとの関係は、かなり錯雑していて、際立って特徴ある対応は認め難い。ただ右の中では、(4)が最も重要な資料になるかと考えられ、そこで示したような考え方が成り立つとすれば、慶応本と御伽草子本とは、ほぼ直線的な系譜の上に位置づけ得ると目してよく、一方、清涼寺本は一応別系統と見るべき性質を備えているとすることが出来よう。但し、慶応本と清涼寺本との間には、何らかの相互関係が存在したことを考えねばならない点も見せている。それに対して、清涼寺本と御伽草子本との間には、直接的関係を認めさせる材料は乏しい。

五

続いて三本の詞章の考察に入る。詞章の面でも大体を言えば、慶応本と御伽草子本とは、大筋はほぼ一致し、後者の方が叙述が所々節略されているのに対して、清涼寺本は、上の二本に近い個所と、全く表現の異なる個所とが断続的に現れるといった関係にあるが、細部に立ち入ると、やはり種々の疑問が起きてくる。次に、原文の引用が非常に長くなるが、三本の詞章を若干の場面において対比して検討を加えてみたい。

(1) 巻頭の部分

清涼寺本

慶応本

御伽草子本

さてよこふゑは、せんそをたつぬるに、
つこの国かんさき君の、ちやうしやのむ
すめ、これなり

(中略)

そのよこふゑかすかたを、物によくよ
くたとふれは、きんこくゑんの山さく
ら、きやうかさんのこうも、かしよ
うけのもみち、おんこのふしの花、け
んほんのなしのくゑたるを、そむくに
ことならず、らんしやの匂ひ、みにそ
なへ、ゆうなるにようはうなりしかは
心をかけぬ人そなき、心をかくる、み
なのたまつさのかよふ事、物によくよ
くととふれは、春の村雨、秋のかり、
しやうようきうの雨、ふるやののきの
玉みつも、いかてこれにはまさるへき
されともよこふへ、心よきなをとる、
かせふかぬまの夕けふり、なひくかた
なりければ、さてしかるへきゑんはな
くして、にんよいん御かたにまいり、
つねに心はすみかまの、けふりはそら
にいたつらに、つらく物をあんする
に、うき世の中、かりのやとゆへなん

今一人のよこふゑは、行へをくわしく
きくに、まことにあわれなる事共かな
つこの国かんさきといふしゆく、遊く
んか子なり

やうがんびれいにして、いつくしき事
かきりなし、かれかすがた、物にたと
へは、かすみにおふ春の花、かせにみ
だるゝあをやぎの、いとたをやかなる
ふぜいなり

其ころ、みやこにきこへたまふ、くわ
んむてんわうには、だい五のわうじ、
一ほんしきぶきやうかつらわらのしん
わうには、九代のこうゑん、さぬきの
かみまさもりのま子、ぎやうぶきやう
たゝもりのちやく子

大でう大じんたひらのきよもり、にう
だうじやうこくとて、上もなき人なり
つこの国ひやうごに、みやこをたて、し
ほのひる間「の」、つれくたに見出た
まへは、しやうらうびやうしの、世の
ならい、人間あだなる事を、つくく
とあんじたまひ

しやうこくがかたみにとて、つきしま

今一人のよこぶえか、ゆくゑをたづぬ
るに、まことにあはれなる事どもなり

そのかたち、やうがんびれいにして、
いつくしく、かすみに匂ふはるのほな
かせにみだるゝ青柳の、いとたをやか
に、あきの月にことならず

彼比、都に聞え給ひし

ぢやうかい入道どのに、うへこす人ぞ
なかりける

津の国兵庫に都を立

後の世迄のかたみと思召、つき島をそ

のちのわすれくさ、しもかれぬまのひと心、つらくくわんしつゝ、ひとか

をこそつかれけり、むかしが今にいたるまで、誠にたへぬ事とかや

つかれける、誠に末代まで、絶せずとかや

たなることを、つくくくわんしたま

ひて、かたみにとて、つきしまをつか

れ、いまにたえせず

右の文においては、慶応本と御伽草子本とは、非常に密接な関係をもっている。後者に欠けている部分を見ても、清盛の系図を長々と叙べた所や、築島をつく時の清盛の感慨など、有っても無くても、叙述の筋には変りのない詞章である。従って、御伽草子本が慶応本について、部分的に削除したとも、逆に御伽草子本の本文が古態で、慶応本は修飾句を挿入したとも、両様に考え得るが、はじめの方の、慶応本の『つの国かんさきといふしゆくの、遊くんか子なり』の句が御伽草子本に欠けている点は、前章において検討した如く、慶応本が古いと認められるので、後の二個所も、御伽草子本の省略とする方が、妥当性がありそうである。

一方、清涼寺本の方は、叙述の運びも一致しないし、横笛の容姿の譬え方にしても全く異なっている。清涼寺本を別系とするに、好個の材料の一つとなし得るのであるが、ただ疑問の点が一個所ある。それは終りの方の傍線を附した部分で、前よりの続きからすると、横笛のことを叙べているようであるが、終りに『かたみにとて、つきしまをつかれ、いまにたえせず』とあるのを見れば、清盛に関する叙述でなければならぬ。そこで、前に誤脱があるものとして考えると、慶応本にのみ見える『しほのひる間のつれくたに見たまへは』以下の文と、叙述の内容に相通ずるもののあることが感ぜられるのである。これはどういふことなのであろうか。もし両本のこの部分が同じ意図をもった表現であれば、慶応本と清涼寺本との間には何らかの交渉のあったことを考えねばならない。

(四)滝口から送られた懸想文を、それとは知らず横笛が披いて読む条

清涼寺本

よこふへは、我身のうゑとしらすして
ひきあけてよみけり、もしのつゝき、
よしありさまに見へたり、歌をみれば

身はうき露のごとく、むめのたちての
うくひす、きしうつ浪のふせひして、
かみなかのしつ、たにのうもれ木と、
かきとゝめて

人はよもおもひもよらぬわかこひの
したにこかれてもるゝこゝろを
つゝみかねなかなすなみたの露ほとは
かゝるあはれを君はかけすや

よこふへ申けるは、くすのうらはそと
は、我か身はこゝにありながら、ちゝ
に心のかよふことなり

身は露のやうにとは、よそなる君ゆゑ
に、心はそらにあくかれて、梅のした
へのうくひすは、こへふりたてゝ、な
くはかりなり、きしうつなみのわけい
とは、君ゆへ心をくだくらんと也、か

慶応本

よこふへ、わが身の事とはしらすして
ふみをさらくゝとよみ、ふてのたてど
ころ、もんじのちらしやう、よしある
ふぜいと、おくゆかしくそおほゆる

身はうきくものごとくなり、さくらの
たちゑのうぐひすは、きしたつなみの
ふぜいして、のなかのしみづと、かき
とゝめ

人はひさおもひもよらじわがこひの
したにながれてもゆるこゝろを
君ゆへにながすなみだのつゆほども
おもはゞいかゞうれしからまし

よこふへ申けるやうは

身はうきくものごとくとは、てんじや
うなるきみゆへに、心をそらにあくが
るゝ事也、さくらのたちゑのうぐひす
とは、こへふりたてゝ、なくばかりの
事也、きしたつなみとは、君ゆへ心を

御伽草子本

横笛、わがみの上とは知ずして、ふみ
こまぐとみ給へば、筆のたてやうな
ど、よし有御ふみとみえ侍りける、う
たをみ給へば

身はうき雲のごとく也、むめのたちえ
のうぐひすは、岸うつ波のふぜいして
野中の清水、谷のむもれ木と、書留

人はいさ思ひもよらじ我恋の、した
にこがれてもゆる心を
君ゆへにながす涙の露程も、われを
おもはゞうれしからまし

横笛申けるは、くずの下葉とは、われ
は爰に有ながら、ちぢに心のかよふ事
也

身はうき雲のやうぞとは、あまのよそ
成君故に、心はそらにあこがるゝ事也
むめのたちえのうぐひすは、こゑふり
たてゝ鳴斗の事也、岸うつ波のふぜい
とは、心をくだくらん、野中の清水と

み中のしつみとは、人にとわれず、ひとりすむ事也、野中のし水とは、人にと
とりすむとなり、^Eうつみ火とは、した われず、すむ事なりと、かたりければ
にこかれて、物おもふなりとて、かた ^E埋火とは、こがれて物思ふの心也とぞ
りければ 語給ひける

この部分では、詞章は三本ともおおよそ類似しているが、ここでは、慶応本に無くて、清涼寺本と御伽草子本とのみにある句が、傍線ACDEの如く四個所も見える。Aは別として、CDEについては、このように、文の中の謎の如き詞を解き明かすことは、「浄瑠璃十二段草子」をはじめ、室町物語にはしばしば用いられている手法で、その詞も極めて類型的である。従って、偶然の類似ということも考慮に入れる必要があるが、右の文の場合、偶合とするには余りにも一致し過ぎている。特にDは、前の滝口の文言葉の中に、それに対応する句が無い。恐らく不用意に書いたものであろうが、そうであれば、ますます偶然の一致の起る可能性が少い。またEはCに対応する句であるが、Cで「埋れ木」とあるのをEでは「埋み火」としたことも、両本の間で一致しているのは不思議である。どうしてもこの個所では、清涼寺本と御伽草子本とが直接のかかわりをもっていたとしなければならぬような事実が見られるのである。(Bも清涼寺本と御伽草子本が一致し、慶応本のみが異なる。しかし、ここは梅と桜の字の草体が似ている所から、慶応本が誤ったのであろう。意味からしても、当然「梅」とあるべき所である。)しかし、同じ右の文中にある二首の歌の後の方では、慶応本と御伽草子本とが一致し、清涼寺本のみが違ふという現象も現れていて、その間の関係は、この三本のみと比較では解明する術が無いのである。

(い)前の文の少し後の所で、滝口の乳母が横笛を説き伏せて、返書を取って帰り、それより二人の逢瀬が始まる条。

清涼寺本

慶応本

御伽草子本

いつそや、こ松との御つかひに、ま
いりたまひて候たきくちと申ひと、一
めまいらせてより、いまは、まよひの
やまうに、ほたれさせたまひ、いきの
かよひはかりに候へは、人をはひとこ
そたすけ候へ

されは、おのゝこまちは、^Aしゐのせう
しやうのおもひをかゝりて、十七のと
しちゝにわかれ、十九にてはゝにはな
れ、二十一にてあにゝおくれ、うきな
けきをしられしも、ひとのおもひを、
やすめさりしゆへなり

こと更、なげきのはかなきは、こいの
みちとこそ申候へ、^Bあふせのたよりは
たまわらすとも、心やすむる一ふとと
さまゝに申ければ、よこふへ、おも
ひもよらすやとて、^Cみやき野ゝみち、
ふみだかへたるにやとて

うつみ火のしたにこかれておもふと
も、^Dきえなむのちそさひしからまし

いつぞや、小松殿よりの御つかいに、
まいり候へしたき口、御身を一め見ま
いらせしより、おもかけのたちそひて
さてゝわすれがたく、今ははや、わ
ずかのいきのかよふ斗にて候へは、人
は人をたすけ候へ

されは、おゝ野小町は、^A四ゐのせうし
やうの思ひかゝり、十七の年ちゝにお
くれ、十九の年君にわかれ、うきなげ
きをせしぞとよ、人のおもひを、や
[す]めざりしゆへなり

ことさら、なげきのわりなきは、恋の
みちとこそ申候へ、心をやすむるほと
の一ふでは、やすき程の事也、御返事
ばかりあそばし候へと、こまゝと申
けれ「は」、よこふゑこれをきゝ、あら
おもひよらずやとて、^Cみやきのゝみち
ふみだかへたるにやと、かきとゞめ

うつみ火のしたにこがるゝときくよ
りも、^Dきえなんのちは恋しかるへし

いつぞや、こまつどの御使に、参給
ひしたきぐちどのゝ、君を一めみ参ら
せ候より、御面かげのわすられがたく
て、^{ちか}纒にいきのかよふ斗にて候へば、
人をば人社たすけさふらへ

されば、をのゝ小町は、人の思ひのす
ゑとをり、後には、あさましき身とな
りたるよし、うけ給はる

殊更、わりなきは、此こひの道とこそ
申侍る、中かはの、^Bあふせはしらせ給
はずとも、一筆はやすき御事なれば、
御返事あそばし給へかしと、こまゝ
と申侍りければ、横笛思ひよらずとて
みやまぎの、文たがへたるにやとて

うつみびのしたにこがるゝと聞から
に、^D消なん後ぞさびしからまし

とあそはして、ひきむすひて、よには
つかしけにて、いたされけり

返事をとりて帰りけり、さる程にたき
くち、いまやくと、まちわひていた
りけるに

とあそばされて、ひきむすび、世には
づかしげに、さしいだしたまふふぜひ
E
かほに十二ひとゑをひきかくし、から
すばのくろかみ、ゆりながし、かおに
まゆずみ、にをやかに、物いたいなる
其すがた、いつくしき御かたち

たき口のこひたまふも、ことはりと、
おぼ〔ゑ〕ける

さてもめのと、御返事取てかへるほど
に、たきぐち、今やいつやと、まちわ
びて、^Fのきはの「おぎの」そよぐおも、
それかと、むねうちさわぎ、つま戸を
風のたゞきしも、心ほそくまちわびて
わかれをつくるとりのこゑも、さすが
わかれもつらからん、おもひそめつる
はじめより、めのと御所よりかへりし
お、まちしおもひは、中々に、たとゑ
んかたぞなかりけり、あまりのおもひ
にや、ねもせず、おきもやらずして、
よそに人のこゑのするをも、わかめの
とにてやあるらんと、むねうちさわぎ
まつ所に

とあそばし、引結びて、よに恥かしげ
に出したる有様、誠に美さ、何にたと
へん方もなし

殿の恋けるも、^{ことほり}断とこそ、思ひけれ

御返事取て帰りけり、さてたきぐち、い
まやくと、むね打さはぎ待給ふ、心
の中ぞ哀なる

めのと、かの御返事をとりいたしければ、たきぐちはこれをみて、うれしさかきりなし

めのと、ひそかに立よりて、かの御ふみを取出し、御返事にて候とて、まいらせける、たき口、これおよみて、うれしさたとゑんかたぞなき

さる程にめのと、ひそかに立より、かの文取出して奉たてまつる、たきぐちは是をみて、うれしさは、何にたとへんかたもなし

(消ス)
 画かのまつのいわなりとも、あさきところも有ぬへし、ことかりそめとはおもへとも

その後、たびく文共有て、あふせの中となり給ふ

しのひしのひと、おもへとも、日かすもつもり、あるときは、さとへとて、

おさゝの一ふしも、世にあさからず、ちぎりければ、月日をたつにしたがい

をさゝのなかのひとふしも、契そむれば、ある時は里へ出、忍びて通ふ時

かよふ時もあり、又あるときは、月みなとにいひなして、かよひければ、たかひに、ふかくおもふ程に、むかしは物をおもひしに、ひよくれんりのかたらい、あさからず、ちぎりたまへは、たゝかりそめとおもへとも、としころかよひけるとかや

て、ある時は、かぜのころといひなして、日かずをおくるよはもあり、たがいにあさからず、ひよくれんりのちぎりをこめ、ことかりそめとおもへとも、年月おかよひけるほとに

有、又かせの心ちといひなして、忍びくにかよはれける、ひよくれんりの契をこめ、ことかりそめとは思へ共、ねんらいとし月、かさなりける

この文も、三本ともに似通った筆の運びを見せている部分で、全体からすれば、慶応本と御伽草子本とに、(イ)の例と同様の性質をもった関係を認めることが出来るが、部分的には、清涼寺本と慶応本、清涼寺本と御伽草子本との関係をも考えさせる材料を提供している。すなわち、傍線A・Cの語句は前者であり、B・D・Gは後者である。中でCは、清涼寺本・慶応本の「宮城野の道ふみたがへたるにや」の方が意味がよく通る。御伽草子本の「深山木の文た

がへたるにや」について、市古博士の注では「深山に立っている木が人に知られず、人を知らないように、何もわかない人が、文を届ける相手を間違えたのかしらと云って」と解されているが、この意味での言い回しとしては、余りに婉曲過ぎるようである。「宮城野の道」であれば、「宮城野の道を踏み違える、それではないがそのように文を違えた」と、すっきりした表現になる。恐らく御伽草子本の『みやまぎ』は、『みやきの』を誤読した所から出てきたのであろう。またGはHと対になった句であるが、Gでは清涼寺本と御伽草子本が、Hでは慶応本と御伽草子本が、夫々一致するという現象を見せている。つまり御伽草子本は、清涼寺本と慶応本から夫々一句ずつを取って対にした如き形なのである。なお、EとFは、慶応本にのみあって、他の二本共に省略されている詞章である。ここでは、(口)のA B C Dの四例及びこの文のB Gの二例に見られたのとは、反対の現象において、清涼寺本・御伽草子本の近似が現れている。但し、Eは横笛の容姿についての細かい形容、Fは横笛の返事を待ちわびる滝口の心情の描写で、御伽草子本は、前者を『誠に美さ、何にたとへん方もなし』、後者を『心の中ぞ哀なる』という簡単な抽象的文句で代用しているの、それも無い清涼寺本とは、性質を異にするという点も認めなければならぬ。従ってこの場合は、偶然の類似という可能性も多分に考えられるのである。

(二)横笛が滝口の往生院の庵室を尋ねて行く道行の条。

清涼寺本

慶応本

御伽草子本

あまりにたえかね、やるかたもなければ、よこふへは、けんれいもんをしのひるて、なくくあくかれゆくほとに、うちやみにまよひてゆく、みなみをはるかになかむれば、らいせいもん

あまりのおもひにたえかねて、〔けむれんもんゐんの御所を立て〕、あくかれ行ほとに、いぬいの方ときくからに、大そらにまよひ出て、みなみのかたをなかむれば、大うちの跡とおほ

あまり余の思ひにたえかねて、むざんや横笛御所を忍び出給ひ、あこがれ行程に、乾のかたと聞なれば、うちのにまよひ出て、南を遙にながむれば、大りのあとおほしくて、らしやうもんはあれ

はあれはてゝ、石すゑはかりそのこりける

あとのみやこを帰りみれば、ほつしやうしのたうを見る時そ、九をんの名残おしかるへし、つくりのおのゝおとはいといたう、いるたきうき世の、別し人はうきかせの、われはうらみ草かつら、くるしき道を行ほとに、うち野ゝはるは花さかり、露おもけなるこはきはら、かきわけくゆくほとに、なみたにくれて、みちも見へす、おもひみたるゝいとすゝき、はたをるむしやすたくらん、ふりすてらるゝ、身のうきに、ねをなきそふるすゝ虫の、こゑをたよりに行ほとに

C
そめどのゝきさき御くわんしよ、ほうこんゐんを、うちすきて、ならひのおかの秋かせは、きんのねをや、しらむらん、いかたをくたすおほる川、いせきみつをななめつゝ、かくそゑいしたまひける

しくて、らいせひもんはあれはてゝ、せきいのみや残らん

A
御とばのゐんのいにしへ、春なつおくりて、秋の山、むれたつ松にふく風も心ほそくぞおぼへける、北をはるかにながむれば、春をわすれぬさくら花、あらしをつたふにおひまで、思ひや「ら」れて、あわれなり、南にかゝれはたまほこの、みちはさだかに見へねども、ならひのおかに、つきにけり

C
みな元殿ゝ御さんさう、ほうこんがうゐんを、さしすぎて、つり殿ゝ御さんさう、松のあらしのをのずから、ことおしらへて、たにの水おとすさまじくくるしみをしたひて、なめらかに、となせのたきのながれには、井かだをく

はてゝ、いしずへ斗ぞ残りける

A
又、とばの院の西へ行、春夏過て、あきの山、むらたつ松に吹風も、心ほそくぞ覚えける、北の遙にながむれば、春を忘ぬ梅の花、主忘ぬ匂にて、思ひやられて、玉ぼこの、道さだかにみへね共、ならびの里に、かゝりつゝ

C
そめどのゝきさき御さんさう、ほうゐんを、さし過て、つり殿三さう、まんのあらしのをのづから、ぎんのおをしらべ、谷の水をとすさまじく、とくせのたきのながれも、いかたをくだす大井川、いせきの水を詠つゝ、かき

だす大井川、いせきの水のなかれによ
(マ、) かくなん
そて、

あつめたるもしほくき、やるかたなき
の余に、かくぞゑいじける

せきあくるなみだの川のはやきせに
あふよりほかのしからみそなき

せきのぼるなみだの川のはやきせに
おふよりほかのしからみそなき

せきあへるなみだの川のはやきせに
あふより外のしからみそなき

この条の清涼寺本の詞章には、他の二本と非常に近い部分と、相当に離れている部分とが入り交っている。ところが此処にも、Cの句の如く、清涼寺本と御伽草子本がほぼ一致して、慶応本のみが異なる個所が見える。この句は三本共同じ場所を指していると思われるが、『ほうこんゑん』『ほうゑん』は該当する寺が考え当たらず、慶応本の「法金剛院」が正しいようである。この寺は、もと雙岡にあった清原真人夏野の山荘で、後に寺となして雙岡寺と号し、また天安寺とも号した。その後荒廃していたのを、崇徳院の御宇、待賢門院が再興され、法金剛院と称したと伝えられる。この寺であれば、三本共にある「雙岡」あるいは「雙里」云々の記事に照応する。此処は文徳天皇の御陵に近く、「三代実録」天安二年十月十七日の条に、天皇崩後、陵の辺に三昧を修する沙弥二十口を雙岡寺に住ましめたとの、また、翌貞観元年八月二十一日の条に、皇太后すなわち染殿の后が、この寺に僧を請じて、法華経を講じたとの記事が見える。清涼寺本と御伽草子本に、「染殿の後の御願所、あるいは御山荘」とあるのは、その意味であろう。従って両本の『ほうこんゑん』と『ほうゑん』が『ほうこんがうゑん』の誤りであることは、ほぼ確実である。前者は「がう」を脱したのであろうし、後者は「こん」を続けて書くと「え」の仮名と似通ってくるので、案外そうした経路を経た誤りではなからうか。すると、清涼寺本と御伽草子本とは、ますます関係が深くなってくる。しかし一方、慶応本の『みな元殿の御さんさう』も、これでは法金剛院との結びつきが理解出来ないので、これも何か

の誤りとしなければならぬが、「染」と「源」との草体には似通った所があるので、慶応本の筆者の拠った本には「染殿」とあつたのを「源殿」と読み誤つて、『みな元殿』と書いたのではないかという想像をめぐらすことが出来る。そこで、この個所は、御伽草子本が清涼寺本とのみ関係があつて、慶応本の系統とは関係が無いとする程の根拠にはなし得ないのである。

なお、右の文で、慶応本と御伽草子本に見えるD・Fの句は、後者に誤植がある。また、同じくAの句の「鳥羽院」は洛南の地であるから、建礼門院の御所から嵯峨への道行の叙述において、御伽草子本のように『とばの院の西へ行』と、非常な遠回りをするのは甚だ不合理である。その前に『南を遙にながむれば』の句がある所からしても、慶応本のように鳥羽の院の昔を思いやるといふ言い方が自然である。これは、『いにしへ』を『西へ』としたことから生じた誤りであろう。Bは、両本共語句はよく似ているが、内容はかなり違っている。御伽草子本は北野神社の道真の詠んだ梅を思いうかべているのであるが、慶応本は一般的な叙述である。此処も、前の『南を遙にながむれば』と対応する句としては、慶応本の『北をはるかにながむれば』の方が良い。御伽草子本は『北を』に「北野」を連想したところから、『さくら花』を『梅の花』に、『あらしをつたふ』を『主忘ぬ』に、夫々言い換えてきたのではないか。桜と梅の字の草体は似通っているし、「あらし」と「あるし」にも類似点のあることも、右のような転換を容易にしたかと思われる。このように、D・F並びにA・Bにおける両本の間には、「小敦盛」の絵巻と御伽草子本との関係と、類似したものが認められるのである。その外、Eは慶応本にのみ見えるが、この句は意味が明瞭でない。そのために御伽草子本が省略したと考え得るし、また逆に、御伽草子本にのみ存するGの句については、『かきあつめたるもしほくさ』は「やるかたなし」にかかる序詞で、このような表現が言い慣わされていたと想像されるところから、

ここは『やるかたなきの余に』という修飾句が適切な個所であるので、慣用句を挿入増補したものと言うことが出来る。

余り長くなるので、長文の引用はこれ位にとどめ、慶応本と御伽草子本、清涼寺本と御伽草子本との関係を考える材料のみを、もう少し挙げてみる。(1)から(6)までは前者で、本文の対照は、上が慶応本、下が御伽草子本である。なお、(1)(3)(6)(8)は、第二・三章の、明暦板や神宮文庫本との比較の項においても、既に一度取り上げた個所である。

(1)かけひのみづのこゑくに、かけてならさぬあらずだれ、
しばのあみ戸に松のはしら、かうのけふりにそめ_なして、
うき世の事おくわんずるに
事_なを観_みじつゝ

滝口が往生院の庵室に籠った時の情景描写の文の一節である。御伽草子本の『ならひぬ』は「ならはぬ」の誤りであろう。日本古典文学大系本の注は「少しもなれていない香煙に身をそめて」としているが、「かけてもならはぬ」の解釈に不安が感ぜられる。慶応本の『かけてならさぬあらずだれ』(「ならさぬ」はやはり「ならはぬ」の誤字であろうか。掛け慣れていない荒簾の意)の方が意味がはっきりする。清涼寺本も『かけてならわぬあしすたれ、しはのあみ戸に竹はしら』とあり、その下の「香の煙にそめなす」の句は無い。慶応本の傍線の部分を脱したために、御伽草子本の如き句が出来、『かけてもならはぬ』の意味が落ち着かなくなつたのではなからうか。

(2)しぐれにふるゝ松たにも、かわらぬいろはある物を、あり
しよのむつごとにも、ひのなか、みづのそこまでも、かわ
らじとこそちぎりしに、はやくもかわる心かな
しぐれにぬれぬまつだにも、又いろかはる事も有、火の中、
水のそこまでも、かはらじとこそ思ひしに、はやくもかはる
心かな

滝口の庵室の前で、横笛が述べる口説_{くた}ごとの中の言葉である。御伽草子本の如く「時雨に染まらない松でさえも色

の変ることがある」では、滝口の『はやくもかはる心』も尤もだという意味の文脈になってしまふ。ここは慶応本のように「時雨に触れる松でさえ色が変わらないのに、それにひきかえて貴方の心は早くも変ってしまった」という言い回しになるべき所である。御伽草子本が不注意から間違えたものとしなくてはならない。

(3)あだなるもつれなきも、うき世の人の、いのちにてとゞめ　あだなるもつれなきも、いのちうきにかぎらぬならひかや、
たり、うきにはきゑぬならひとて、いかなるくわこのいん　いかなるくわこのいんぐわにて、かゝる思ひをするやらん
ぐわにて、かゝるおもひをする物かな

滝口が横笛の亡骸を抱いて嘆く場面に見える文である。これは前述の如く(二一〇頁参照)御伽草子本では意味がよく通らない。恐らく(1)と同じく、慶応本の詞章を良い加減に省略したことから生じた、不完全な文章のためと思われる。以上は慶応本から御伽草子本へと、詞章が転化してゆく過程において、省略や誤脱が起つたものと考えさせる例である。それに対して次のような例も見られる。

(4)うき世を物にたとふれば、きくのしたばのねなしぐさ、入　うき世を物にたとふれば、きしのひたいのねなしぐさ、入え
ゑの水のすておぶね　の水にすてをぶね

滝口が父の不孝に逢つて、無常を感じる所に出てくる句である。この句は「倭漢朗詠集下、無常」の中にある「観身岸額離根草、論命江頭不繫舟」の詩からきている。従つて御伽草子本の方が正しい。清凉寺本も『きしのひたいのねなし草』とある。慶応本の前の句は、「きし」を「きく」と見誤つた所から生じたのではなからうか。

(5)さてもいにしへ、はなをみ、月をな「が」むるも、二人みる　さてもいにしへは
にはくもりなや

くをうごかすあらがみも、おもふ中はよもさけじと、い　くもをうごかすかみなりも、思ふ中をばよもさけじと、ちぎ
ひつるすぎしことのはも、いまのごとくにわすられす　りつることのはは、いまのごとくにわすれず

(2)の例と同じ場面にある句。この句も、「古今集、恋四」の「天の原ふみとどろかしなる神も思ふ中をばさくるものかは」の歌を踏まえていると思われるが、それならば、やはり御伽草子本の方が正確である。清涼寺本にはこの句は無い。

(6)いにしゑのはなのすがたは、きゑはてて、のきばをてらす 　　さても、いにしへのすがたは、つきはてて、軒をてらざるゆ
夕がほの、花のいろこそ、てらしけれ 　　ふがほの、花のいろこそ、かなしけれ

(3)と同じ場面の終りにある句。これは「横笛の昔の花やかな姿は消えてしまつて、淋しい夕顔の花の色のようになつたのが悲しい」という意味の文であろう。この場合『のきばをてらす』より『軒をてらざる』(市古博士の注に「照らざるは照らさざるに同じ。照るは四段活用 of 他動詞、照らすの意」とある)の方が妥当であるし、終りの『てらしけれ』『かなしけれ』の句も、後者でないと意味が通らない。この文も清涼寺本には欠けている。このように(4)(5)(6)の三例は、前の三例とは逆で、御伽草子本の本文の方が良い訳である。

次に、清涼寺本と御伽草子本とが関係する個所を掲げる。

(7) 清涼寺本

その夜は、しやかたうにまいり、きね
ん申やうこそ、あはれなる

なむ大おんけうしゆの、しやかによら
い、こんやのりしやうには、あかてわ
かれしたきくちに、^Bうちそふまでこそ
なくとも、いま一め、^A見せてたひ給へ
と、心なきさうもくも、うたをかわし

慶応本

其夜は、こくうざうにまいり、御つや
申て、夜もすがら、申やう

ねがわくは、御ほとけ、しゆじやうを
たすけましますは、あかでわかれした
き口と、^Bうちそふまではあらずとも、
ありしすかたを、今一め、みせてたび
たまへと、なみだをながし、夜もすが

御伽草子本

其よは、こくうぞうに参り、つやを申
て、よもすがら、申やうこそ哀也

ねがはくは、御ほとけなうじゆまし
く^Aて、ふう婦のみちをかなしみて、
のにふし山にすむ迄も、つばさをかさ
ね、契をなすとかや、うけ給はり候へ
ば、しゆじやうをたすけましますさば、

て、さすとかや、山にすむけた物、木
にやとるとりまでも、つはさをかさね
ぬはなし、もとより、大し大ひをさき
として、我らかことくの、しゆしやう
までも、あまねくすくわんどの、ちか
ひなれは、いかてかうき身一人、もら
し給はんやと、なみたをなかし、夜も
すから、ねんしゆして、さよふけかた
に、すこしまとろみけるに

ら、だひじだ〔い〕ひと、ねんくわんし
て、さよふけがたになりしかば、まど
ろむところに

あかでわかれしたきぐちを、一目みせ
てたび給へと、なみだをながし、よも
すから、すこしまどろむ所に

横笛が滝口の庵室を尋ねて行く道で、仏に祈願をかける言葉である。御伽草子本の傍線Aの句は、慶応本には脱けて
いる。ところがこれと同じ内容を叙べている句が清涼寺本には見えるのである。（御伽草子本の『のにふし山にす
む迄も』は、「野に伏し山に住む鳥獣までも」の意味であろう。）しかし一方、B・Cの句は、清涼寺本と慶応本とに
あって、御伽草子本にのみ無い。ただCは、御伽草子本の『よもすから、すこしまとろむ所に』では変で、当然Cの
如き句が間になければならない所である。また、右の文を全体として見れば、叙述の運び方は、慶応本と御伽草子本
とが一致している。すなわち、この短い文の間で、三本の中二本ずつが三様の関係を見せているのである。一体これ
はどのように解釈したらよいか。可能性のある関係としては、次のような見方が出来はしないか。一は、御伽草子本
の本文が直接ついたのは慶応本系であるが、その際、清涼寺本系の本をも見て、Aの句はそれによって補ったとする
見方である。御伽草子本におけるAの句の、前後との文脈上の続き工合には不自然な所があつて、慶応本の『ねかわ
くは御ほとけ』と『しゆしやうをたすけましませは』との二つの句の間に、無理に挿入した感があるからである。B

・Cの句が無いのは、省筆あるいは不注意による書き漏しであろう。今一つは、清涼寺本と慶応本との中間に位する本文をもった本があつて、御伽草子本はそれを承けているのではないかという考え方である。清涼寺本と慶応本とが直接にはなくとも、中間の本を介して、相互に関係するのではないかと思わせる材料が、既に挙げた文例の中にも見られたからである。

(8) 清涼寺本

かゝりけるところに、つまきとる山人、河よりむかひにて
あれくとははわれとも、つゐにはかなく、なりにけり

御伽草子本

かゝりける所に、つま木とる山人、かはむかひにて、あれよ
くとはばれど、ほどとをければ、終にはかなくなりけり

既に今までに幾度か引用した所である。この文は慶応本には全く欠けている。しかし、この文に続いて、山人が滝口の庵室の前を通りながら友人と語る言葉の中に、『十七八の女はうの身をなげ給へるを、あれよくといひつれど、川よりこなたをとる事なれば、あはれさ申はかりなし』（御伽草子本。清涼寺本・慶応本にもほぼ同様の句がある）という句があるので、右の文が無くても、叙述の運びの上に支障はなく、むしろ重複する嫌いのある文である。もし御伽草子本にのみ、この文があるのであれば、明らかに増補と考えることの出来る部分であるが、清涼寺本にも、ほとんど同文の詞章が存在するのはどういうことなのか。これについても、やはり(7)の場合と同じことが考えられると思う。

(9) 清涼寺本

身のうきかすは大井かわ、なみたにみちは、かきくれて、
いそくとすれと、程とをし

御伽草子本

身のうきかすは大井がは、なみだのみちは、かきくれて、い
そぐとすれど、ほどとをく

前の文の少し後で、滝口がもしや横笛ではないかと、千鳥が洩へ急ぐ所の叙述である。慶応本には、傍線の句のみが無く、後はほとんど同文である。こういう道行の文には常套の、掛け詞を使った句であるから、偶然の一致の起る可能性もあるが、やはり(7)(8)と同じ理由を考えても良いのではなからうか。

六

前章で引用した(ロ)(ハ)の三例と、(7)(8)(9)の例文の前後の個所とは、清涼寺本が他の二本と比較的近い詞章を有している部分で、その外は更に離れている所が多く、(イ)の例のように、全く関係の無い別の表現をとっている詞章も幾個所が見られる。従って、全体として見れば、御伽草子本が直接交渉をもつのは慶応本のみであるとして良さそうであるが、部分的な語句においては、清涼寺本とも何らかのつながりのあったことを考えねばならない材料が、少数ながら散見する。では、慶応本と御伽草子本との本文は、どのような関係をもっていたのであろうか。まず両本の本文の先後関係であるが、それは、この作品だけでなく、室町物語全般に亘って、室町期古写本と江戸期の諸伝本における文体や用語を精密に比較して、その結果と照してみないと、決定的なことは言い難いであろう。私には、まだそこまでの準備が出来ていないのであるが、前章までに挙げてきた多くの事実によって窺うと、基本的傾向としては、「小敦盛」の場合と同様の関係が存在すると思われる。すなわち、御伽草子本の本文は、慶応本の如き古写本につきながら、その叙述を所々節略していった形をなしているのであるが、その際、誤解や不用意な省略から、本文を悪くしたということが認められるのである。中には、これとは逆と言える現象を示している例も幾つか存在するが、それらの個所を子細に検討しても、右の推定を覆すに足るほどの意味はもっていないと思う。次に、その関係が直接的な

ものであるか否かという点であるが、両本の詞章に使用されている語句には、「小敦盛」における絵巻と御伽草子本との間よりも、むしろ類似が多く見られる。しかし一方、御伽草子本は、慶応本とは別系統とすべき清涼寺本と一致する語句も使用している。そこで、第四章の終りで一応想定してみた、慶応本から御伽草子本への直線的系譜は、詞章の上からは、無条件には承認し得られないのである。御伽草子本の本文が、慶応本と清涼寺本との両系統の本を照合して、折衷したのであれば別であるが、さもなければ、慶応本よりは、もう少し清涼寺本の方へ寄った本が存在して、それが御伽草子本の本文の出てくる直接の祖本となったと考えるのが無難であろう。

御伽草子本の本文の出て来た経路を、右のように想像してみた。しかし、管見の資料の範囲内では、御伽草子本の本文に先行し、且つその成立に最も深い交渉を有する本は、慶応本の外に無い。従って、御伽草子本の本文の、室町期の原態に対してという意味においての性格は、慶応本との対比を中心として考えるより方法が無いのである。この方法によって見れば、それは、「小敦盛」の場合と基本的には変らないと言えよう。ただ、こちらにおいては、慶応本自身の本文が、「小敦盛」の絵巻ほどに良くない。慶応本にも誤脱や意味の通じない詞章がしばしばあり、御伽草子本の方が、かえって良くなっている場合のあること、前に挙げた如くである。また御伽草子本の本文そのものも、全体として見て、「小敦盛」のそれほど粗末ではない。従って、「小敦盛」の場合と一律に言うことは、必ずしも事実に見えない面が存するのである。しかし、慶応本と対比して、御伽草子本において詞章の大幅に節略されている箇所を見ると、それらは今日から見れば、さして必要性の感じられない叙述で、省略によってむしろすっきりしたと言える如き例が幾つもあるが、慶応本のそういうくどさは、この類の物語の、室町期の古い本文にはしばしば見られる所で、これが室町的な一つの特徴であったと考えられる。その意味では、この「横笛草紙」の御伽草子本の本文も、や

はり室町の古態からは遠ざかったものとする事が出来よう。

附記 「小敦盛」と「横笛草紙」の二篇について、御伽草子本の本文を、室町期古写本との比較を中心として考察したのであるが、この二篇のみでは、まだ結論とすべきものを提出するのは憚られる。更に他の作品についても、同様の検討を加えた上で総合的に考えたい。(現在の所、私が同じ方法による調査をなし得るのは、はじめに記した如く、「文正さうし」と「蛤の草紙」の二篇に限られるが)だが、本稿の二篇だけでも、室町物語の研究に当っては、諸本の比較が極めて重要な意義を持つことが窺えよう。単に本文校勘の上のみでなく(むしろ余りにも本文の流動がはげし過ぎて、諸本間の対校は不可能な場合が多い)、あらゆる分野の研究が、それを基礎としなければ成り立たないと言える性質を有しているのである。しかもこの種の物語は、今なお新しい資料が次々と現れてくる状況である。本稿の如きも、今後新資料によって補正されなければならない場合が、必ず生ずることを予想している。

終りに、資料の閲覧調査、写真撮影に寛大な御配慮を賜った所蔵者各位に、厚く御礼を申述べらる次第である。